# 南宋鄭定刊『重校添註音辯唐柳先生文集』考（下）

戸　崎　哲　彦

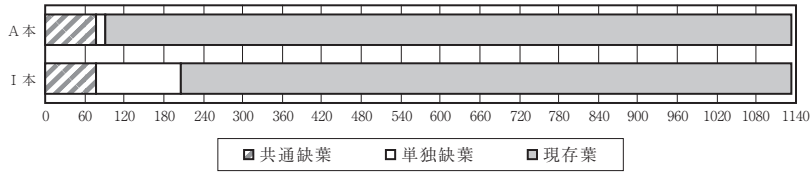
## Ⅳ　現存鄭本の缺葉とその補配

鄭本は南宋刊の貴重な一本であり、現存諸本の中でＡ本とＩ本とが四五巻・外集二巻を備えた足本ではあるが、しかしともに缺葉・脱葉や影鈔・補刻が少なくなく、しかも補配は鄭本によるものとは限らない。まずこの点を強調しておき、以下、諸本間の補配葉の関係とその構成および所拠本についていささか考察を加え、資料を提供する。

### 鄭本の補配葉と諸本間の関係

１）Ａ本とＩ本の関係：問題のある巻首つまり「序」および「目録」を除いて、Ａ本には缺２葉（02-07、03-13）と空白葉、つまり劉本を資料したことで前に詰まって空きの生じた巻末２葉（01-36、23-17）があり、Ｉ本には缺１葉（15-23）[1]・空白葉 11 葉（01-21・22・24、32-15、35-02、38-05・06、42-09・19・39、45-24）があるが、これ以外での補配部分は、Ａ本が 88 葉、全体の 7.8％、Ｉ本が 191 葉、全体の 16.9％にも及ぶ。Ａ本は楊氏旧蔵本であり、それを購入した王文進の記録によれば[2]、購入時の状態で「補鈔「目録」及巻中八十餘葉」であったというから、「八十餘葉」が「目録」を除く数であれば、現存本の 86 葉（88-2）に極めて近い。これに「序目」を加えれば現状ではＡ本は約１割に、Ｉ本は２割に近い部分を失っていることになる。

しかし幸いにも両本および現存する他の諸本で若干葉を補完することが可能




[1] いずれもマイクロフィルムに拠ったものであり、撮影の際の誤りである可能性も考え得る。
[2] 王文進『文禄堂訪書記』巻４（上海古籍出版社 2007 年、p257）。

である。Ａ本の缺葉数はＩ本の約半分であり、その缺葉部分はＩ本とほぼ重なるが、Ａ本が原葉を缺き、Ｉ本が原葉を有するもの3葉（02-07、03-13、24-04）、あるいはＡ本が他本で補配しているがＩ本が原葉を有するもの9葉（01-35・36、10-18、14-9、20-02、22-03・04、30-15、39-05）、計12葉がある。つまりＡ本缺葉の内、12葉をＩ本によって補足可能である。

２）Ｉ本とＢ本の関係：Ａ・Ｉ両本に次いで残巻が多いのはＢ本17巻（+「目録」1巻）である。Ｂ本に補配はなく、残巻は両本の半分にも満たないが、数葉の出入りを除いてＩ本と同じであり、しかもＩ本よりも缺葉が若干多く、かつ蠹害が激しい。Ｂ本の年代が「在三部中印行最早」[3]とされる所以であろうが、缺葉の多寡は印行後の収蔵段階で生じるものでもあって断定はできない。Ｉ本の缺葉を若干保有するが、すべてそれらはすでにＡ本中にある。缺葉の多寡が版木の存否によるものであれば、逆の時間関係、つまりＡ＞Ｉ＞Ｂの順での成立もあり得る。

３）他本との関係：Ｂ本に次いで存巻の多いのはＥ本五巻である。Ｅ本とＦ・ＧＨ本（5巻＝3＋2）の関係は明確にできないが、ともにＡＩ本に共通する缺葉がない。Ｅ本は、存五巻で見る限り、Ａ・ＩＢとは別の過程を経ている。

今日、序目を除くＡ・ＩＢ両系統共通缺葉83中、Ｅ本によって19-07・08、20-09、43-07・08を、またＧ本によって09-27・28を、Ｈ本によって10-17を補うことができる。Ｄ本は未見であるが、最大で3葉（20-09、22-09・10）の補足が期待できる。Ｆ本も未見であるが、その残存部分にＡ本中で缺葉はない。したがって現時点で鄭本の缺葉にして不明な部分は63葉から60葉（83-12-8-$\alpha$；$\alpha \leqq 3$）、つまり全葉の約5.6％がなお不明である。

**（１）鄭Ａ本の補配葉とその所拠本**

Ａ本の補配部分は、「影鈔による補写」[4]であることが特徴である。Ｉ本のような補刻はない。影鈔部分は大小字数・刻工名がないことによって原刻葉との区別が容易につく。問題は影鈔の所拠本であり、明らかに一本ではない。前述の「目録」部分が巻中の標題による再構成であるのを除いて、一葉全体を欠落する類と一葉中の部分を欠落する類とに分けられ、いずれも複数本に拠っている。以下、所拠本の判断根拠と問題点について述べる。

---

[3] 昌彼得『〔増訂〕蟫庵群書題識』（台灣・商務印書館 1997年）「跋宋刊本《重校添註音辯唐柳先生文集》」（p265）。

[4] 『國家圖書館善本書志初稿』（p133）、『増訂中國訪書志』（p553下）。

| A本 | 葉 | 版口 | 字数 | 魚尾 | 卷葉 | 工名 | A本缺葉の所拠 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 原刻 | 全 | 白口 | ○ | 単一 | ○ | ○ | |
| 影鈔 | | | | | | | 「目録」（各巻の標題に拠る） |
| | | | × | | | × | 拠鄭本：■ 30　（下線はＡＩ両本共通缺葉）<br>03-12・20、04-03・04、05-07・08、14-09、19-07・08、20-02・09、23-03・04・05・06、24-04、25-02・12、27-10・12、29-07B・08、30-11・12、31-12・16・18、32-13・14、44-15<br>拠鄭本魏本：● 26<br>03-17・18、05-19・20、14-16（白釘）、16-20、22-03・04・09・10、24-09・17、25-01・05・08・11、27-09、28-11・12、30-15、31-11・15・17、44-14・16、外目-02<br>拠廖本系統：★ 25<br>01-05・13・14・19、02-03・04・14、09-27・28、10-17・18、25-06・07・23、26-23・24、33-05；38-05・06、39-05、42-45・46、43-07・08、外 02-19<br>拠劉本：▲ 8<br>01-35、03-27・28、04-*17*、13-22・23、23-15・16、44-29 |
| | 部分 | | △ | △ | △ | △ | 拠鄭本：01-31 等<br>所拠不明：21-04B 、26-09、28-13、31-01、31-02、33-05B・06A 、37-10B 、40-01A 、41-10B 、43-49・50 |

**A 01：全葉影鈔**

影鈔の所拠本は、「～曰」形式を有する魏本とそれを一律刪除した廖本[5]との対校、さらに註文の簡略な内容の劉本との対校によって究明可能であるが、今日知られていない資料も存在する。

**拠鄭本**：各葉の文中に「添註」や「重校」を含む例は鄭本に拠るものと見做していよい。当時、Ａ・Ｉ・Ｂ本のような缺葉の系統ではないもの、たとえばＥ本のような系統が存在してそれに拠ったのである。

ただし中には多くの舛訛が存在する。例えば 01-13 は、「添注」（B03）二字を有するが魏本では「孫曰」に作っており、このような失誤は他にも偶に見られるが、1 葉において「～曰」註 7 条中、半分以上が異なるのは単なる失誤ではない。その内「九土晞」（B05）下の註は次のような対応関係になる。

| A 01 本補葉影鈔 | 九土九州〇晞一作熙今正 |
|---|---|
| 魏本系統 | 孫曰九土九州　晞一作熙 |
| 廖本 | 九土九州　晞一作熙 |
| 劉本 | 一作熙 |

[5] 廖本の「凡例」に「一：舊註引“某氏云”者並倣朱子『離騒集註』例，皆刪去」。

影鈔補葉には「孫曰」二字がなく、しかし別の位置に「今正」二字がある。次葉14も影鈔であり、同様に魏本の註と同内容の「～曰」の姓に不一致が多い。これも前葉と同様の方法、つまり廖本に拠りながら刪除された「～曰」二字分を適当に補填したように推測されるが、問題は単純ではない。たとえば「獸之窮」題下註の末は全く異なる。A本影鈔補葉（B05）には

童曰：唐高祖救生民於塗炭，皆“太宗遏亂略，致太平，雖「古之聰明・睿智・神武而不殺」[6]者，無〔以〕尚也。”

とあり[7]、この註文は魏本・廖本にも、さらに劉本・韓本にも見えない。「童曰」は他と同様に南宋初・童宗説の註と考えねばならないが、この二字は後人が補填した可能性があるとしても、同内容の註文の存在はまったく知られていない。これは北宋・朱長文（1039-1098）の言である[8]。これが鄭本に在ったならば「添註」の内容に相当する。ただ廖本のみ題下のこの位置に

邵本云：「獸之窮」十九句：“其十五句，句三字（45）；其三句，句七字（21）；其一句，句四字（4）。”以“天厚黄德，狙獷服”、“自亡其徒，匪予戮”、“縻以尺組，噉以秩”為三“七字句”，“弓弭失箙”為“四字句”。

という長文の註がある。これも魏本等には見えないが、魏本を含む現存本はいずれもこの作の末尾に

「獸之窮」二十二句：其十八句，句三字（54）；其四句，句四字（16）。

という。「十九句」あるいは「二十二句」は正文であり、それ以下は句構成を示した小字による旧註、おそらく原註である。一首の字数（70字）は同じであるが、邵本には全く異なる句数と句構成が示されていた。「其一句，句四字」つまり一句のみというのは不均衡にして不自然であり、「弓弭失箙」の前後は、「甲之櫜弓，弭失箙」七字一句と読むべきであろう。そうならば一首全体は今本のように「二十二句」に断句され、邵本は誤りである可能性が高い。しかし実際そのように作っていた一本が存在したことは、「為三“七字句”」「為“四字句”」とする解説を加えていることからも明らかである。たしかに邵本は取り上げるべき特殊な異本であった。この条が魏本になく、廖本にあるならば、

---

6 『周易』「繫辭上」。

7 呉文治『柳宗元集』（中華書局 1979 年）・尹占華『柳宗元集校注』（中華書局 2013 年）には見えない。

8 朱長文『墨池編』（熙寧七年序）巻 9「續書斷」の「妙品」に「唐太宗文武聖皇帝，遏亂略，致太平，雖古之聰明・睿智・神武而不殺者無以尚也」。

その拠った鄭本に在ったのであり、その内容を考慮すれば、鄭本は「添註：邵本云：……」に作っていたはずである。

「邵本」とは何か。詳しくは後述する「邵武本」か、あるいは魏本『柳集』巻首「諸儒名氏」に「西山邵氏：名博,字公濟，議論見文集」という、『邵氏聞見』『後録』（紹興二七年 1157）で著名な邵博（？-1158）が考えられる。しかし鄭本には「邵武本」とあって、「邵本」という例がなく、また同文は今本『邵氏聞見』『後録』には見えない。鄭本は多くが「韓本」「呂本」「謝本」のように姓一字で示すが、「邵本」ではなく「邵武本」と称するのは、「邵」が姓でもあるために「邵武」二字にして地名であることを明示せんとする配慮による。ならば「邵本」の「邵」は姓である可能性が高い。しかし見えるのは鄭本ではなく、廖本であるが、廖本あるいはその拠った所にも同様の配慮があるのではなかろうか。

この二葉は、内容が多く魏本に似ていることから鄭本に拠ったようにも推測されるが、今日全く知られない註を含むものとして極めて貴重である。ちなみに後の主要な輯註本である明末の蔣之翹本も魏本等と同じ。

**拠鄭本魏本**：「～曰」を含み、かつ魏本と一致する内容から廖本ではないが「添註」「重校」を含んでいない葉については所拠本が魏本か鄭本か判断し難い。この類は数多いが、すでにＡ本がＡ本とは別の缺葉本である鄭本と廖本系統を用いていることは明らかであり、さらに魏本を用いる必要はない。また魏本は中国では後に劉本系統本の普及に押されて淘汰されていた。この類も多くが鄭本に拠っているのではなかろうか。

**拠廖本系統**：魏本に近いが「～曰」に多くの不一致があることから、廖本系統に拠って適当に「～曰」を補足したものと推測される。しかしこの類にも不明な点が多い。たとえば 01-05 の内容は、最も魏本に近く、次いで廖本に近いが、「～曰」の註計 11 条中、魏本と註文内容が同一であるにもかかわらず、「～」姓が異なる註が 7 条もあり、また魏本と同内容の註文ではあるが「～曰」二字の無いものが 5 条もある。さらに「陟降連連」（B08）下に至っては、眉・魏・廖および劉・韓の宋本には一字の註も無いが、影鈔補葉には

連：「陵延切。『説文』：“負，連也。”一曰：連屬。」[9] 又，「力展切，難也，

[9] 『集韻・下平聲・僊』に「連、璉：陵延切。『説文』“負，連也”，一曰：連屬。」という。ちなみに『廣韻』では「連」は「下平聲・仙・連」に「連：合也，續也，還也，又姓，……又有赫連氏。力延切。」というのみ。

『易』：“往蹇來連。”」[10] 又，「郎旰切。〇連石，山名。」[11]

という、おそらく『集韻』に拠った[12]、長文の註がある。管見によれば明に至って蔣本が「『爾雅』：連連慼慼，惟求鞠也」[13] と註する[14]。影鈔の註が何本に拠るのか未詳であるが、極めて詳細な註を含む一本であったことが知られる。

A 01 全葉影鈔に見られるこのような矛盾、つまり魏・廖両本との不一致は、如何に解釈すべきか。鄭本缺葉の復元は、廖本に拠ることで基本的には可能であり、現に拠っていると思われる例もあるが、魏本系統にあって今本にない、さらに補註された一本に拠っている例も多いと考えねばならない。それが果たしていつ、誰の手になる一本なのか、またそのような一本がかつて存在したとしても、魏本系統にありながら魏本の「～曰」となぜ多く齟齬するのか。あるいは無「～曰」の廖本系統に補註した輯註本ではないかとも推測されるが、確証はない。いずれにしてもA本缺葉は、きわめて貴重な註文を含む点において柳文研究において無視できない資料である。

**拠劉本**：「潘」註は劉本のみに見える。また註文内容において劉本と魏本系統との相異は歴然としており、比較的容易に判別可能である。ただし鄭・廖を用いながらなぜ系統の異なる劉本も用いているのか、疑問が残る。

**A 02：部分影鈔**

版木が経年による一葉中の一部分の腐食・破損のために後人が補写したものがある[15]。

**拠鄭本**：文中に「添註」を有することによって鄭本に拠ると判断される。

**所拠不明**：鄭本が底本とする魏本と異なるが、相異点の多くは「～曰」部分にある。これも廖本に拠りながら適当に「～曰」を充当した例と考えられる。ただし註文内容には廖本に合致しない部分があり、適宜改易されている可能性がある。たとえば 40-01A「祭楊憑詹事文」題下註に引く「孫曰」の末（ℓ 04-

---

[10] 『集韻・上聲・獮・輦（力展切）』に「連：難也。『易・蹇卦』：“往蹇來連。”」という。『周易』「蹇卦」の「往蹇來連」の註に「連，亦難也。」

[11] 『集韻・去聲・換・爛（郎肝切）』に「連：連石，山名。」

[12] 『集韻』は上記の三音を載せるが、ちなみに『廣韻』では「連」は『下平聲・仙・連』に「連：合也，續也，還也，又姓，……又有赫連氏。力延切。」という一音のみ。

[13] 今本『爾雅』には見えない。

[14] 呉文治『柳宗元集』（中華書局 1979 年）・尹占華『柳宗元集校注』（中華書局 2013 年）は蔣本も「主要校本」（「整理説明」p6）に挙げられているが、採られていない。

[15] 阿部隆一『増訂中國訪書志』（p554 上）が「この本は撫印清良の刷りであるが、やや墨付き悪い所は丁寧に墨でなぞってある」と解釈されている部分ではなかろうか。

05）は次のように作る。■は墨釘、／は改行を示す。

| | |
|---|---|
| A本 40-01A | 為憑從子婿*據碑碣* / 即憑壻也〇添註楊氏誌*父禮部* / 郎中凝據此則…… |
| Ⅰ本 40-01A | 為憑從子婿■■■ / 即憑婿也〇添註■氏誌■■■ / 郎中凝據此則…… |
| 魏本・眉本 | 為憑從子壻韓曰公即憑壻也 |
| 廖本 | 為憑從子婿據楊氏誌父禮部郎中凝則…… |

劉本にこの註文は無い。A本の補写部分にI本は墨釘を入れているから、早くから欠損しており、A本は魏本ではなく、廖本あるいはその系統に拠って欠損部分の文義を考えて補修したと判断してよかろう。

**（2）鄭Ⅰ本の補配葉とその所拠本**

Ⅰ本は影鈔だけでなく、補刻もあり、しかもその葉数は多く、版式の相異も加わって、さらに複雑な様相を呈している。

**I本補刻 01：同刻工名の異版**

文中に「重校」「添註」を有し、しかもA本原刻葉に対応するならば鄭本に拠る補修であるが、同一の刻工名を刻しながら字様等を異にする類がある。

**拠鄭本 01**：同一葉で同一の刻工名を有しながら文字・字様等を異にする類。

01-06 は、A本・I本ともに刻工名は「王顕」であるが、A本「童曰」（B01）をⅠ本は「虞曰」に、「利」（A09）を「刺」に、A本「悖」（B03）の「忄（心）」をI本は「人」に作る。また、「進」（A04）・「狂」（A07）・「兖」（B05）等の筆致も微妙に異なる。ちなみに魏本は「童」「刺」に作る。「虞」氏の註はこの一例であり、字形不鮮明による誤字であろう。

01-08 は、A本・I本ともに刻工名は「陳良」であるが、I本は「蹈韓作踰」（A08）、「孫」「有」（A09）、「孫云」「孫」（B01）が白釘であり、「註」を「注」（B01）に作り、また「惠」（A03）・「蹈」（A08）・「酋」（A09）・「屠」（B02）等の字様が明らかに異なる。

01-23 は、A本・I本ともに刻工名「毛端」は同一であるが、大小字数をA本は「四百十九」に、Ⅰ本は「三百六十六」に作る。実数は 366 字、Ⅰ本が正しい。また、A本「遮」（B05）の「灬」をⅠ本は「从」に作り、「深」（A01）・「歳」（A03）等も筆致が微妙に異なる。

02-26 は、A本・I本ともに刻工名は「鄭錫」であるが、大小字数をA本は「一百二十一」、Ⅰ本は「一百二十」、実数は 201 字、A本が正しい。また、A本「夭」（A05）をⅠ本は「夫」に誤る。

| B本 | 版口 | 字数 | 魚尾 | 巻葉 | 巻-葉（刻工名） |
|---|---|---|---|---|---|
| 原刻 | 白 | ○ | 単【 | ○ | 南宋原刻 |
| 補刻01 | | | | | 據鄭本■：〔網掛け＝A本では鄭本；ゴチック＝墨釘・白釘有り〕<br>01-06(王顥)・08(陳良)・17(丁松)・23(毛端)・26(丁松)・27(王遇)・28(王遇)；02-26(鄭錫)；05-05(毛端)　01-02(曹冠宗)・07(陳良)、12-18(繆恭)、17-01(朱梓)<br>40-02・21；44-15 |
| 補刻02 | 黒 | × | 単【 双【＝≪ | | 據鄭本■：39-15(石昌？)；43-36(墨釘)；44-*17*(徐□)；45-18(高文)・19・20(?)・25(?) |
| | | | | | 據鄭本■〔計56〕〔下線＝A本と共通缺葉〕<br>01-31・35・36；03-01(曹)・02・06(曹)・20(曹)・25・26(??)；04-02；07-07(曹)・08(?)；08-19(?)・20(?)；09-*03*(?)；10-20(□)；11-01・02；12-07(?)・08(□)；14-01(?)；16-05(曹)・25(曹)；17-03(??)；18-07(?司)；21-03(曹)・*04*；22-15・16(曹)；26-09(??)・10(曹)；29-01・14(?)；30-14(?)・20(??)；31-02；32-01・02(□)；33-06(□)；37-*01*・02；39-01・16(曹?)；40-01・17・18・30(□)；41-03・10・11；42-24(?)・41・42(?)；43-49(??)；44-13(?)・15・*29*(?)<br>據劉本▲〔計61〕<br>01-1314(沈良)・19；02-0304・14(周)；03-12(曹?)・17(曹)・18；04-03(沈良)・04(周)・17(?)；05-07(曹□)・08(沈)・19(沈)・20(沈)；09-27(周)・28(?)；10-17(沈)；13-22(沈良)・23(?)；14-16(??)；16-20(?)；19-07(??)・08(??)；20-09(曹)；22-09(?)・10(曹?)；23-03(?)・04・05(沈)・06(??)；24-09(?)・*17*(周)；25-01・02(周)・05・06・07(??)・08(沈良)・11(沈)・23(沈)；27-09(曹)・10；29-07(周)・08；30-11(沈)・12；31-11・12・15(?)・16(周)・17(?)；32-13(?)・14；42-45(??)・46；43-07・08(??)・*50*；外下-19(周) |
| 影鈔 | 白 | | 単【 | | 據廖本★〔計53〕<br>03-27・28・29；04-01；05-25・26；06-09・10；10-05・11・12・19；12-11・12・13・14；13-05・06；23-15・16・17；25-12；26-03・07・08・*13*・*23・24*；27-12・13；28-*11*、31-*18*；*32-05*；33-05・07・08；40-08・14；41-04；42-11・12；43-09・10・11・12・29；44-14；45-02・17；外下-05・06・13・14；<br>據劉本▲〔計16〕<br>01-05・1516；02-13・17・24；25-24；28-12；35-01；37-04・16・20；38-17・18；44-16<br>拠未定〔計2〕<br>08-*23*；外目-02(各巻標題に拠るか) |
| | | | | × | 空白葉：01-21・22・24；15-23；32-15；35-02；38-05・06；42-09・19・39；45-24 |

05-05は、A本・I本ともに「毛端」刻であるが、A本は「三百八十七」、I本は「四百三」、I本が正しい。また字様は先の二例以上に酷似するが、「助」(B09)字が微妙に異なる。

さらに問題を複雑にしているのが、刻工名や大小字数・字様も全く同一であるが、版框の異なる類である。鄭本原刻本は左右双欄、上下単欄の版式であるが、01-02（曹冠宗）・07（陳良）、12-18（繆恭）、17-01（朱梓）の葉は、Ａ・Ｉ両本ともに同一刻工名であるが、Ｉ本では下辺が双欄になっている。

この他に、同版のように見えるが、筆致に相異を認めざるを得ないものがある。01-17（丁松）は「及」（B04）・「死」（A05）・「怒」（A04）・「紘」（A06）等、01-26（丁松）は「鼓」（A05）・「負」（B05）、27（王遇）は「威」（B09）・「古」（B09）、28（王遇）は「大」（B07）がＡ本の筆致と微妙に異なる。丹念に対校してゆけばこの類は多いのではなかろうか。

**拠鄭本 02**：以上の例は字様は頗る似ているが、この他に全体的に明らかに字様が異なり、かつ墨釘・白釘を有する葉がある。

43-36（墨釘）、45-18（高文）・19・20（?）・25（?）はＡ本と同じ大小字数を有するが黒口であり、かつ墨釘を有し、字様も異なる。中でも 43-36 は刻工名部分も墨釘になっており、全体にわたって誤刻も多い。44-17 は、白口であるが、Ａ本の刻工名「徐禧」と同じ「徐□」のように見え、墨釘が入っており、「賈」「商」「成」「無」「武」等の字様に微妙な相異が見られる。全体的に線は粗く、明らかに後刻である。39-15（石昌 ?）も白口にして同様の例である。

これら拠鄭本 01・02 補刻は、原刻本と一致する刻工名が複数名存在するから固より偶然の「同名異人」[16] ではあり得ず、また同一人が経年劣化後にも存命していて同葉の再刻に及んだとも考え難い。後人が缺葉部分を鄭本によって覆刻し、刻工名まで忠実に刻したと解釈すべきである。

**Ｉ本補刻 02：異刻工名による補刻**

以上の補刻とは別に、原刻本には見えない刻工名を有する補刻葉が相当量存在し、しかも鄭本に拠るとは限らない。

**拠鄭本**：鄭本に見えない刻工名「曹」を有する葉が多い。この類は黒口・大小字数無し、双魚尾、字様も全体的に明刻に特徴的な右上がりに変わっており、墨釘を有するものが多い。

また、同じ黒口・大小字数無し、字様の特徴を有するが、刻工名が無く、あるいは単魚尾になっている類（30-20 等）がある。

---

[16]『増訂中國訪書志』（p554 下）は「高文の刻工名があるが、原刻の刻工名が移刻されたか、同名異人であろう」。

**拠劉本**：明らかに劉本に拠り、黒口で「曹〔顕〕」[17] の他に「沈良」「沈」「周」等の刻工名を有するが、魚尾の双・単は統一されていない。たとえば 01-13・14「沈良」刻葉は双魚尾、05-19「沈」刻葉は単魚尾。なお、01-13・14 は版心の葉次は「十三四」と刻されているが、これは劉本に註が少なく、したがって十三・十四の 2 葉が 1 葉に収まったためである。02-03・04 の一葉「三至四」のように表記される場合もある。註の少ない劉本に拠った場合は往々にしてこのような短縮現象が生じる。

拠劉本の類には拠鄭本と異なる特徴がある。1）拠鄭本に見られた墨釘がない。2）曹・沈・周等の刻工名を共有する。3）Ａ本と缺葉が共通する。同じ段階での補刻を想定してみるべきであろう。

**Ｉ本影鈔**：

補配の内、影鈔による葉の存在は、白口・無大小字数・無名であることや版式・字様から見ても一目瞭然であるが、補配の所拠は一本ではない。

**拠廖本**：多くは内容が魏本と同一にして「～曰」が無いことから拠廖本であると判断される。ただし完全には一致しない葉もある。たとえば 32-05 葉は次の通り：

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 魏 | | 舊注潰心亂也古對切 | 童曰說文礦銅鐵樸石也古猛切慘七感切據此文言…悍疑慘當作燥字 | 孫曰炯光也戶茗切 |
| A | 重校類下　有異字 | 舊注憤心亂也古對切 | 童曰說文礦銅鐵樸石也古猛切慘七感切據此文言…悍疑慘當作燥字 | 孫曰炯光也戶茗切 |
| I | 類下一有異字 | 憤古對切心亂也 | 礦古猛切銅鐵樸石也慘七感切據此文言…悍疑慘當作感字 | 炯戶茗切光也 |
| 廖 | 類下一有異字 | 憤古對切心亂也 | 礦古猛切銅鐵樸石也慘七感切據此文言…悍疑慘當作燥字 | 炯戶茗切光也 |
| 劉 | | 憤古對切心亂也 | 礦古猛切銅鐵樸石也慘七感切潘本慘作燥先到切乾也 | 炯戶茗切光也 |

Ｉ本は、廖本との類似およびＡ本との相異から廖本に拠ったものと判断される。ただ「燥」を「感」に誤る。また 33-05 も、次表のように、「食」を「日」に誤るが、廖本に拠ったと判断しなければならない。

[17] 阿部隆一『増訂中國訪書志』（p554 下）は「曹顕、曹、沈良、良、司、周、徐の刻工名があり」、また『國家圖書館善本書志初稿』（p134 右）＃ 09757 に「修補本刻工名：曹顯、曹、周、沈良、沈、良、徐」。マイクロフィルムでは 05-07「曹□」であり、「顕」は識別できない。しかし阿部氏等は現物を直接手にとっての鑑定であり、信頼性が高い。

| | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 魏 | 童曰號名也 | 聖一作賢 | 韓曰出孟子 | 與吝同 | 孫曰詩大明之文翼翼恭謹皃 | 孫曰書文王…不遑暇食〇一本無暇字 | 孫曰孟子…待旦 | 孫曰書高宗…非武王也 |
| A | 童曰號名也 | 聖一作賢 | 韓曰出孟子 | 與吝同 | 孫曰詩大明之文翼翼恭謹皃 | 孫曰書文王…不遑暇食〇一本無暇字 | 孫曰孟子…待旦 | 孫曰書高宗…非武王也 |
| I | 號名也 | 聖一作賢 | 出孟子 | 與吝同 | 詩大明之文翼翼恭謹貌 | 書文王…不遑暇日 | 孟子…待旦 | 書高宗…非武王也 |
| 廖 | 號名也 | 聖一作賢 | 出孟子 | 與吝同 | 詩大明之文翼翼恭謹貌 | 書文王…不遑暇食 | 孟子…待旦 | 書高宗…非武王也 |
| 劉 | | | | 與吝同 | | | | |

次表の 28-11 は判断が難しい。「魚」「畫」は劉本と共通するが、註文の有無はより廖本に近い。

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 魏 | 補註謂慧遠也 | 顚語豈切 | 職日切又音質 | 補注巽上人名重巽 | 續胡對切 | 繒疾凌切 | 筏音伐 |
| A鈔 | 補註謂慧遠也 | 顚語豈切 | 職日切又音質 | 補注巽上人名重巽 | 續胡對切 | 繒疾陵切 | 筏音伐 |
| I | 謂慧遠也 | 顚魚豈切 | 職日切　音質 | 巽上人名重巽 | 續胡對切畫也 | 繒疾凌切 | 筏音伐<br>水中大簰 |
| 廖 | 謂慧遠也 | 顚語豈切 | 職日切 | 巽上人名重巽 | 續胡對切 | 繒疾凌切 | 筏音伐<br>水中大簰 |
| 劉 | | 顚魚豈切 | 職日切　音質 | | 續胡對切畫 | | 筏音伐<br>水中大簰 |

影鈔には、このような若干の相異を含み、拠廖本と判断すべきものが圧倒的に多い。

**拠劉本**：鄭本と同じ系統にない劉本を用いている部分もある。しかもその劉本は宋元刊本ではなく、明刊本である。その明白な根拠が次表に示す 29-07 である。

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 眉 | | | 披拂潭中俯視游魚類若乘空 | 以其境過清 |
| 魏（兪氏覆刻本） | | | 披拂潭中俯視浮魚類若乘空 | 以其境過清 |
| A | | | 波拂潭中府視游魚類若乘空 | 以其境過清 |
| I | | | 披拂潭中下視遊魚類若乘空 | 以其境過清 |
| 廖 | | | 披拂潭中俯視游魚類若乘空 | 以其境過清 |
| 劉 | 宋元刻 12 行本 | | 披拂潭中俯視游魚類若乘空 | 以其境過清 |
| | 明刻 13 行本 | | 披拂潭中下視游魚類若乘空 | 以其境過清 |
| | 四庫 | 文淵閣 | 披拂潭中下視游魚類若乘空 | 以其境過清 |
| | | 文津閣 | 披拂潭中下視游魚類若乘空 | 以其境過清 |

Ｉ本のみが「下視」に作り、かつ字書に見えない「竟」に作る。これと一致するのはわずかに正統戊辰年（1448）善敬堂王宗玉刊本の系統（四部叢刊本）[18] のみである。

鄭本が用いられていないことがＩ本影鈔部分の特徴であるが、補刻では鄭本も用いられている。また、影鈔所拠は廖本が多いが、明らかに劉本も用いられている。なぜ鄭本により近い廖本に一本化していないのか。考えられるのは所拠の廖本が足本ではなかったか、影鈔の年代が異なるか、である。常識的にはまず補刻され、缺落部分を廖本に拠って影鈔し、後に劉本に拠って影鈔するであろう。しかし補刻でも劉本が使われており、逆に廖本が使われていない。

その他、確定できないものがある。08-23 は巻末の 1 行、しかも「永貞元年……柳宗元状」であって諸本に異同はない。廖・劉両本のいずれかであるが、筆致は右上がりであり、劉本に近い。また、外目-02 は各巻標題に拠って編成したものであろう。筆致は拠廖・拠劉とも異なる。

**（３）鄭本補配におけるＡ本とＩ本との関係**

Ａ本とＩ本には影鈔と補刻があり、さらに所拠本が数種類あることから成立年代を決定することは極めて困難であるが、その過程を推測することは可能である。

**補修年代の定説**

Ａ本の影鈔について考究した先行研究を知らない。巻頭「序」に「秀水朱氏潛采堂圖書」朱彝尊（1629-1709）の印があるから、清（1636-1912）初以前、おそらく明代である。さらにえいば「常郡楊伯鎮家藏」の印がないから、それ以後であろうが、前述のように誰の蔵書印であるか寡聞にして特定できない。

Ｉ本については「元至明初修補」[19]、また字様から窺えば「明代初葉」[20] とされる。しかしこれらの説では補刻と影鈔、さらに所拠本の相異は全く顧慮されていない。Ｉ本補刻 02 拠鄭本は、03-01（黒口、「曹」刻）に「莅圃收藏」印があるから、張乃熊（1890-1945）が購入した以前、また 11-01（黒口、無刻工名？）

---

[18] 拙稿「『増廣註釋音辯唐柳先生集』『朱文公校昌黎先生集』合刊初考（上）」、『島大言語文化』38 号、2015 年。

[19] 『國家圖書館善本書志初稿』（p134 右）＃ 09757 に「元至明初修補本」、『増訂中國訪書志』（p554 下）は「〔元・明〕遞補」。

[20] 昌彼得『〔増訂〕蟫庵群書題識』（台灣・商務印書館 1997 年）「跋宋刊本《重校添註音辯唐柳先生文集》」に＃ 09757 について「書中多修補版，作黑口，就字覘之，蓋明代初葉所修補印行者」（p264）。

には葉盛（1420-1474）の蔵書印が押されているから成化年間（1465-1487）初あるいはそれ以前である。ただしこれは拠鄭本部分であって拠劉本との関係を如何に考えるかの問題が残る。

**Ａ本とＩ本の補修過程**

まず、ＡＩ両本の補配には序目を除く多数の共通葉（83）の存在が注目される。Ａ本影鈔 87（92 内“/・-”は 5）葉中では 95.5％。Ｉ本の補配葉は少なくとも 199（206 内“-”は 7）と多いために共通葉はその 41.8％に過ぎないが、共通葉の中で補刻が 62 葉で 74.7％、さらにその中で拠劉本が 57 葉（59 葉）で 92％（95％）を占める。ＡＩ両本に共通缺葉が多いということは、ある時期（Ｘ段階）においてすでにその部分の版木、全体の約 8％を喪失・損傷していたのである。その後、ＡＩ両本は補修される。

Ａ本は少なくとも鄭・廖の二本を用いて補修されている。まず鄭本を入手し、それに拠って缺葉部分を影鈔した上で、さらに不足部分を廖本を用いて補ったと考えるべきであろう。劉本は沈本を祖本としながら魏・鄭・廖三本とは系統を異にしており、鄭本か廖本が入手可能であれば、劉本を用いる必要はなく、かつ実際の拠劉本部分は極めて少ない。これは時期を異にしたからではなかろうか。つまり一度補修して相当の年を経た後にまた缺葉が若干生じ、再度、しかし今度は鄭本・廖本が入手できなかったために劉本が用いられた。巻頭の劉「序」01 は拠劉本（劉文影鈔）であり、朱彝尊蔵書印の存在によって下限は清初明末に求められる。当時、最も流布していたのは劉本である。

Ｉ本では、Ｘ段階の後、さらに缺葉が増え、その量はＡ本の約倍に達している。そこでＩ本の所有者も補修を試みるが、Ａ本とは方法を異にした。Ｉ本には補刻と補写の二段階があり、しかも共に複数本が用いられている。まず補刻が行われたであろう。しかも少なくとも二回行われている。一回は拠劉本であり、これはＡ本との共通缺葉部分に重なる。ただ 43-50 のみＡ本では原刻であるが、上半分の欠損であって共通缺葉と見做せば、Ｉ本拠劉本補刻はＡ本缺葉と 100％重なる。次の一回は拠鄭本であり、共通缺葉以外の部分に見られる。つまりＡ本あるいはその系統の鄭本に拠って補刻し、Ａ本も缺葉する部分は已むを得ず系統の異なる劉本に拠った。たとえばＩ本の補刻葉 01-31 は「重校」「添註」を有するから鄭本に拠ったものであるが、墨釘が数個所にあり（A01・02・03、B03・06）、Ａ本のその葉は原刻（劉昭刻）であるが、墨釘に当たる一部分に欠損あり、補写されている。Ｉ本の 21-04 も補刻であるが、白釘が数行

（B01・02・04 上部）に跨って存在し、Ａ本ではその葉（高文刻）の同じ部分が欠落しており、一部（B01）が補写されている。さらにその後、缺葉が生じたが、今度は補写の方法で補修が行われた。これも先ず廖本を用い、後に劉本が用いられたであろう。

<table>
<tr><td colspan="3">Ａ　本</td><td colspan="5">Ｉ　本</td></tr>
<tr><td colspan="3">補　写</td><td>缺葉</td><td colspan="2">補　刻</td><td colspan="2">補　写</td></tr>
<tr><td rowspan="2">劉</td><td rowspan="2">廖</td><td rowspan="2">鄭</td><td rowspan="2">共通缺葉</td><td></td><td>劉（沈、周、曹刻）</td><td rowspan="2">廖</td><td rowspan="2">劉</td></tr>
<tr><td rowspan="2"></td><td>鄭（Ａ本系統）</td><td></td></tr>
<tr><td colspan="3">原刻</td><td colspan="5">原刻</td></tr>
</table>

このようにＩ本の補刻には二段階がある。共通缺葉拠劉本補刻の刻工は沈・周・曹であり、共通缺葉以外の部分の拠鄭本補刻にも刻工名に曹が見えるが、拠劉本補刻がＡ本と 100％重なり、所拠本も字様も相異するから、時期が異なると考えねばならない。恐らく、まずＡ本系統の鄭本を得て補刻が行われ、後に拠劉本部分がなされた。43-50 が拠劉本であるのは、上半を欠損して版木がさらに損傷した、あるいは喪失した後の補刻であることを告げる。また拠鄭本補刻の中に原刻本と同じ刻工名があるのも早い覆刻であることを窺わせる。Ｉ本の拠鄭本補刻は、11-01 に在る葉盛（1420-1474）の収蔵印によって成化年間（1465-1487）以前、さらに補写は補刻の後にあり、補写は正統戊辰十三年（1448）以後であるから、補刻はそれ以前である。

しかし拠鄭本補刻部分がＩ本を補刻したものであれば、共通缺葉部分の版木はすでに喪失していたとしても、それ以外の版木は残存していて使用に耐え得るものであったことになる。この間の事情を告げる資料が幾つかある。

**嘉興府重刻本『桯史』との関係**

周弘祖（1529-1595）『古今書刻』上編「嘉興府」の条に「柳文」[21] が見える。これが鄭本を指すこと疑いない。本書は明代の嘉靖・隆慶（1567-1572）頃までの記録であるから、350 年前の南宋刻本の書刻ではなく、その後の重刻を指す。鄭本にはＩ本がそうであるように補刻本が存在していた。『古今書刻』が記録するように、補刻が嘉興でなされたならば、他の原版木も嘉興に保存されてい

[21]『百川書志・古今書刻』（上海古籍出版社 2005 年）p346。

たのである。なお、南宋の版木は、特に臨安府にあったものは、多くが元朝に奪われて北に運ばれた。嘉興府は臨安府の東北に隣接する

次に、先に述べた南宋・嘉興軍原刻の『桯史』も、『古今書刻』の「浙江・按察司」に名がみえる[22]。これも南宋本の補刻本の存在をつげる。明代の浙江按察司は杭州府、宋の臨安府に置かれていた。

今日、「宋刻元明遞修公文紙印本（有抄配）」『桯史』（9 行 17 字）が現存しており、それは「補版は多くが黒口であり」「多次の補版を経ており，沈良の補刻は最も多く、他に補版刻工周恭、周仁等の名がある」[23]。しかもこの遞修本は鄭本 A・I 両本の版式の特徴、Ⅰ本補刻過程に極めてよく似ている。遞修公文紙印本『桯史』の版式・編成上の特徴は下表の通り[24]。

| 現存宋刻元明遞修公文紙印本（有抄配）『桯史』 | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 版口 | 字数 | 魚尾 | 刻工 | 刻工名（数）等 | 葉数 | |
| 白 | ○ | 単 | ○ | 劉昭、丁松、宋芾、宋蓁、沈昌、朱春、王顕（前稿を参照） | 29 | 249 |
| | × | | × | 抄配か。 | 4 | |
| | | | | （12-16）は明らかに影鈔 | 1 | |
| 黒 | × | 双 | ○ | 沈良（14）、沈（19）、周仁（1）、周恭（1）、周（4）、得（3）、賢（2）、昌（2）、元（1）、□文（1）、□（3） | 51 | |
| | ○ | | × | 全体の約 66％を占める。 | 163 | |
| | | | | （09-02）（上方にあり） | 1 | |

この現存遞修本は白口と黒口とを有するが、鄭 I 本も白口の原刻あるいは補刻 01 と黒口の補刻 02 を有するみならず、補刻の刻工には同一者、沈良・周の存在が知られた。両本は同様の過程を経て、つまり同地で同時期に、成立したと考えてよい。そこで『桯史』の紙背「丁糧供狀」は「成化十八年（1482）」のものであるというから[25]、それ以後の補刻である。また、『桯史』にはこれとは版式を異にする成化十一年（1475）序の広東重刻本（10 行 20 字）が現存して

[22] 『百川書志・古今書刻』p346。

[23] 『中華再造善本總目提要・唐宋編』（国家家図書館出版社 2013 年）に「補版多為黒口。紙背為成化年間丁糧供狀」「經過多次補版，以沈良補刻者最多，另有補版刻工周恭、周仁等」p421。

[24] 中華再造善本『桯史』（北京図書館出版社 2005 年）六冊に拠る

[25] 李盛鐸著（張玉範整理）『李犀軒藏書題記及書錄』（北京大学出版社 1985 年）「書録」p225。

おり、序に「舊版刻於浙之嘉興，脱落既多」[26] というから、『桯史』の方は当時まだ補刻されていなかった。成化十八年以後の補刻に合致しており、鄭 I 本の補刻の時期もその前後である。ただ、刻工「沈良」「周仁」は他書にも見えるが、その活躍は嘉靖から万暦の間にある [27]。

| 書名 | 刻年 | 刊地 | 刻工名 | |
|---|---|---|---|---|
| 《資治通鑑》二百九十四卷 | 弘治至嘉靖間修補 | | 周仁 | |
| 《後漢書》一百三十卷 | 嘉靖八、九年（1530）刻 | 南京國子監刊 | 周仁 | |
| 《二禮節集解》十二卷 | 嘉靖十六年（1537）刻 | 常州府刊 | 周仁 | |
| 《唐雅》八卷 | 嘉靖二十八年（1549）刻<br>順治十三年（1656）補刻 | 文斗堂（文斗山房）刻 | | 京兆沈良 |
| 《大方廣佛華嚴經》四十卷 | 萬曆十八年（1590）刻 | | 吉水周仁 | |
| 《劉季子書經講義》六卷 | 萬曆二十一年（1593）刻 | 揚州刊 | 周仁 | |
| 《居來山房集》六十五卷 | 萬曆二十二年刻 | 張叔璽刻 | 周仁 | |
| 《史記》一百三十卷 | 萬曆二十四年刻 | 南監刊 | 周仁 | |
| 《兩浙海防類考續編》十卷 | 萬曆三十年（1602）刻 | 浙江布政使司 | | 沈良 |
| 《易經澹窩因指》八卷 | 萬曆三十年刻 | | | 沈良 |
| 《春秋內外傳類選》八卷 | 萬曆三十六年（1608）刻 | | 周仁 | |

『桯史』公文紙印本が成化十八年以後の成立であるのに矛盾しないが、嘉靖・万暦まで 50 年から 140 年もの開きがあるから、同一人物とは考えにくい。今、鄭 I 本の成立は、成化十年卒の葉盛の蔵書印があること、成化十八年の反故紙が使用されている『桯史』と共通する刻工名の存在や紙背の年号によって、成化年間（1465-1487）の初か、早くともその前の天順年間（1457-1464）にあり、刻工の活躍期間（生存）を考えれば、正統年間（1436-1449）まで遡るのが限界であろう。しかし、そうならば、南宋・嘉定十四年（1221）から明・成化年間までは 250 年に近く、版木の約 80％もが使用できる状態で保存されていたとは考え難い。成化十八年の反故紙使用は補刻後の初印ではなく、後印本である

[26] 『中華再造善本總目提要 · 唐宋編』に「明成化十一年（一四七五），建安江泝任職廣東，刊刻《桯史》，今成化刻本有江泝跋文云：“舊版刻於浙之嘉興，脱落既多，讀輒中廢，訪求每恨未見其全者。”江泝訪得雲間陳璧文東批點之本，刊刻行世。」「雖行款與宋刻本不同，且加入批點」「其後，明嘉靖四年（一五二五），桐溪錢如京又據江泝刻本重刻《桯史》，加入附錄一卷。」p422。また、『李犀軒藏書題記及書錄』「書錄」p225。

[27] 李国慶『明代刊工姓名全録』（上海古籍出版社 2014 年）による。「周恭」は見えず。『桯史』では天啓二年長水岳氏刊本を録するのみ（下冊頁 761）。

可能性も考えられる。補刻はかなり早い時期、明代初期、さらには元代になされたのではなかろうか。少なくとも『桯史』と共通する刻工沈良等は鄭Ｉ本の補刻 02 中の拠劉本部分に限定され、その他に拠鄭本部分が、さらに宋本に忠実な白口の補刻 01 がある。これらの補刻は補刻 02 拠劉本である明の中葉よりも相当前にちがいない。つまり元代である。具体的な年代を確定することはできないが、現時点では鄭Ｉ本も「南宋刻元明遞修本」としておくのが穏当であろう。

## Ⅴ　鄭本「重校」「添註」とその校本

鄭本原刻本は、缺葉を有するが、最善本であるＡ本で約 8%、他本によって補えば約 5%に過ぎず、ほぼその全容を知ることができる。鄭定は当時通行の諸本をよく蒐集し、魏本を底本としてさらに校勘と音釈を加えている。以下、この点を明らかにして柳文研究における鄭本の重要性を説く。

まず、鄭本の校註に示される所用の校本によって当時の『柳集』刊行の状況を知ることができる。それは魏本に已見か未見かによって二種類に分けられる。已見本は「晏本」「沈本」「孫本」「舊本」「今本」「俗本」「宣獻本」「別本」等であり、これらは魏本を踏襲したものであるが、さらにその殆どが眉本に、また一部は韓本にも見え、相承関係が知られる。

そもそも魏本は、書肆特異の商法として書名に「五百家註」を標榜するように、「百家註」たる眉本を基礎としてそれを増益したのであるが、音義・訓釈では優れるものの、校勘は貧弱であるという短所があった。南宋に入ると音釈とその彙輯が全国的に大進展するが、『柳文』についていえば、校勘の面においては、北宋末の沈晦が「二千處」[28] を校定したという四五巻本を善本とすることが定説となり、それ以後、永州本が刊行されたが白文無註本であり、また潘緯のように三〇巻本に注意する者もいたが [29]、全体的にはほとんど進んでいなかった。各地から註本が陸続と登場する中にあって鄭定はそのことを痛感していたであろう。そこで音釈の充実した沈本系統の魏本を底本としながら、さらに校勘を窮めんとした。ちなみに現存本（Ａ、Ｂ、Ｅ、ＧＨ、Ｉ）で「添註」

[28] 沈晦「後序」。

[29] 劉本に「潘本作」として他本との異同をいうものは潘緯『柳文音義』であり、潘本は張敦頤「建寧本」四五巻本に拠るが、陸之淵「序」（乾道三年 1167）に「惟内外集，凡三十三通」とあるから、三三巻本も用いている可能性がある。

は 101 条、「重校」は 574 条、未見の残巻（D・F）を加えれば恐らく「添註」は 110 条近く、「重校」は 580 条前後になる。さらに新海博士が指摘されているように「添註」にも「重校」とすべきものが多い。補足すれば「添註：“晞”一作“晞”」「添註曰：“琢”一作“椽”」(01-31 B)、「添註：“而”一作“以”」(02-11 B)、「添註：“爲”一作“與”」「添註：一無“叢”字」「添註：“囑”一作“闞”」(02-22 B)、「添註：一無“矣”字」(03-03 B)、「添註：“合”一作“咎”」(03-05 A）等々、その数は少なくない。これらを加えれば重校は 600 条を越える。『柳文』校勘の功績としては沈晦以後、画期的であった。まずこの点において鄭本の重要性を指摘できる。以下、鄭本の特長である魏本中未見の例を見て行く。

**01：韓本＝紹熙二年（1191）～嘉定十四年（1221）**

「重校」中の引用数から見て、四五巻本にあって魏本系統と最も多く異なる、最も特異な主要校本は、「韓本作」「韓作」「韓有」「韓無」という韓本である。計 91 条にのぼる。

鄭本以前の『柳集』の註家で「韓」といえば、『韓』『柳』二集を詁訓した韓醇を指し、詁訓本の註も鄭本で「韓曰」という書式で引かれる。また、魏本の「柳集評論詁訓諸儒名氏」、さらに眉本の「新刊百家音辯詁訓柳文諸儒名氏」中に見える韓氏は韓醇のみである。そこで鄭本に引く「韓本」も韓醇詁訓本を指すと思われるのであるが、計 91 条中わずか 1 条しか一致しない。巻 34「荅韋珩示韓愈」15B「若（揚）者，『太玄』、『法言』及『四愁賦』」下に

　重校：韓作“四賦”。

というのがそれである。韓醇本も「四賦」に作る。つまり「愁」字の有無についての真偽であるが、これについてはすでに鄭本等に引く孫註に

　「揚雄贊」[30]：“……作「大玄」，……作「法言」，詞莫麗於相如，作「四賦」。”
　而此云“四愁賦”，後人妄加之也。

と指摘する。司馬相如の「子虛賦」「上林賦」「哀二世賦」「大人賦」と比較される揚雄の「甘泉賦」「河東賦」「羽獵賦」「長楊賦」を指すのであって「四賦」が正しい。著名な張衡「四愁詩」との混同があるかも知れない。韓醇本は眉本・魏本等と同じく沈晦本系統に属すが、これによって微妙に相違していたこと、孫註所拠本が眉本に近かったことが知られる。孫汝聴は蜀・眉山県の人である [31]。三〇巻本・四五巻本の二種類ではなく、沈本系においても劉・韓・眉魏

[30] 『漢書』巻 87「揚雄傳」末の「贊」。
[31] 魏本『韓集』『柳集』の「諸儒名氏」に「眉山孫氏：名汝聽，字良臣，全解」。『〔嘉慶〕四

鄭廖などに分岐する複雑な系統樹をなしていた。鄭本には「韓」「孫」を含む混同がしばしば見られるから、この「韓」のみに関していえば鄭本による「孫」の誤字である可能性も否定できないが、他の90％もの不一致、補配葉を除いても80％近い不一致は、同様に処理することはできない。

韓醇本の宋刊本は清代初期までは天祿琳琅に所蔵されていたが、後に散佚して存せず。本稿ではその清鈔本中の優れたもの、薈要本に拠るが、鄭本・清鈔韓醇本の双方に若干の誤字のある可能性を考慮しても、この高い不一致からは、鄭本中の「韓本」は韓醇本でないと断定してよかろう。現存宋刊本『柳集』さらに『文苑英華』所収とその校註や『唐文粹』所収にも一致するものがなく[32]、韓醇ではない南宋・韓某氏によって校勘された一本が嘉定十四年（1221）以前、また後述する趙本との関係から紹熙二年（1191）以後の間に存在していたことを知る。今日に伝わらぬ貴重な一本であり、ここに全てを採録しておく。なお、この「韓本」を韓醇詁訓本と区別するために、以下では「鄭引韓本」と呼ぶ。

鄭本「重校」中の「韓本」

| | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 0<br>1 | 01-<br>08A | 敢蹈愬疆<br>○踰○○ | 3<br>1 | *30-*<br>*12B* | 可以言古不可以言今<br>○與○○○○與○○ | 6<br>1 | 34-<br>14A | 不敢愛惜<br>○○○× |
| 0<br>2 | 01-<br>09B | 蔡風和矣<br>○人○○ | 3<br>2 | 30-<br>13A | 後之人<br>○世○ | 6<br>2 | 34-<br>14B | 稍采取之<br>○○×○ |
| 0<br>3 | 01-<br>28A | 乃知架巢空穴<br>××○○○○（添註） | 3<br>3 | 30-<br>13B | 一二年來<br>一二年× | 6<br>3 | 34-<br>14B | 異日討　也<br>○○○可○ |
| 0<br>4 | 01-<br>28A | 用號令起<br>×○○○ | 3<br>4 | 30-<br>13B | 眊眊然<br>○○× | 6<br>4 | 34-<br>14B | 不於異書<br>○于○○ |
| 0<br>5 | 01-<br>28B | 初罔匪極亂<br>○○不○○ | 3<br>5 | 30-<br>25A | 不知其始<br>○○○○之 | 6<br>5 | **34-**<br>**15B** | **四愁賦**<br>**○×○** |
| 0<br>6 | 05-<br>09A | 灸之乎 ( 後缺 ) 惟<br>○○○，○ | 3<br>6 | 31-<br>04B | 未即籍者<br>○○○有 | 6<br>6 | 34-<br>20A | 多賀多賀<br>○○×× |
| 0<br>7 | 07-<br>02A | 又率其仵<br>×××× | 3<br>7 | 32-<br>03B | 一社一村之制<br>××○○○○ | 6<br>7 | 34-<br>21B | 周孔吾　豈得<br>○○○吾○○ |
| 0<br>8 | 07-<br>05B | 不衡不倚<br>右遶○○ | 3<br>8 | 32-<br>12B | 獨得國故書伏而攻之<br>○○×○○○○工○ | 6<br>8 | 39-<br>18B | 爲裴中丞…狀<br>摽曰：趙本與…合爲一篇 |
| 0<br>9 | 07-<br>05B | 顓念佛三昧者<br>入○○○○○ | 3<br>9 | 33-<br>02B | 其喜不滅之<br>×○○○× | 6<br>9 | 40-<br>27A | 道之出　　者<br>注：一作○○○其離焉○ |
| 1<br>0 | 09-<br>18B | 繇蠶外邑<br>絲○○○ | 4<br>0 | 33-<br>02B | 吾之昧昧之罪<br>○×○○○○ | 7<br>0 | 40-<br>28B | 唯毀死虧禮<br>○○無○○ |
| 1<br>1 | 13-<br>21B | 夫子曰老<br>○○○○老 | 4<br>1 | 33-<br>02B | 吾有足樂也<br>×○○○○ | 7<br>1 | 41-<br>05B | 齊魯誼殄<br>青齊既○ |

川通志』巻一二二「選擧・進士」に「附紹興中進士年分無考者」（71A）にその名が見える。

[32]『文苑英華』とは10・13が一致するが、73以下は詩歌。『英華』および『唐文粹』はこれを収めない。

| | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1<br>2 | 15-<br>15A | 此以民力自固假仁義<br>○○×○××○○○ | 4<br>2 | 33-<br>03B | 而乃克也<br>×○○○ | 7<br>2 | 41-<br>05B | 趙魏顯化<br>○○亦○ |
| 1<br>3 | 19-<br>15B | 吾不似<br>不吾以 | 4<br>3 | 33-<br>07B | 翦翦拘拘者<br>○○○○× | 7<br>3 | 42-<br>50B | 疊前<br>重苔 |
| 1<br>4 | 20-<br>12B | 制曰可其銘云<br>側注：此一段在銘後 | 4<br>4 | 33-<br>07B | 不克爲車之說耶<br>○×○○○○○ | 7<br>4 | 43-<br>32B | 留連秋月晏<br>○○○日○ |
| 1<br>5 | 23-<br>07A | 獲乎已而已以有獲<br>○××○○×○○ | 4<br>5 | 33-<br>09A | 今子　書數千言<br>○○之○○○○ | 7<br>5 | 43-<br>33A | 危橋屬幽徑<br>○梁○○○ |
| 1<br>6 | 24-<br>10A | 左官蒙澤<br>在○○○ | 4<br>6 | 33-<br>11A | 將出於世而仕<br>○○○○×× | 7<br>6 | 43-<br>33A | 繚繞穿疎林<br>○○○空○ |
| 1<br>7 | 24-<br>12B | 是　有其　具<br>○故○濟世之○ | 4<br>7 | 33-<br>12A | 又將千百焉<br>○○十○○ | 7<br>7 | 43-<br>34A | 聊就空自眠<br>○○○舍○ |
| 1<br>8 | 24-<br>14B | 一洄一止一沉<br>○○○○○一 | 4<br>8 | 33-<br>13A | 益學老子<br>○○×× | 7<br>8 | 43-<br>34A | 疎麻方寂歷<br>○○○析○ |
| 1<br>9 | 25-<br>20B | 送元暠師序<br>「送玄舉…序」在此下 | 4<br>9 | 33-<br>13B | 自求暴揚之<br>○○○×○ | 7<br>9 | 43-<br>34B | 公門少推恕<br>○○日○問 |
| 2<br>0 | 26-<br>02B | 鐘鼓笙竽琴瑟<br>○○××○○ | 5<br>0 | 33-<br>13B | 皆得刺列<br>○×○○ | 8<br>0 | 43-<br>34B | 迎新在此歲<br>○○○今○ |
| 2<br>1 | 26-<br>14A | 布其貸利權其入<br>列○貨○○入 | 5<br>1 | 33-<br>16B | 蕩焉泯焉<br>○○×× | 8<br>1 | 43-<br>34B | 縈迴古城曲<br>○○故○○ |
| 2<br>2 | 26-<br>14A | 校其信宿<br>○之，信宿 | 5<br>2 | 33-<br>16B | 是望也<br>○○× | 8<br>2 | 43-<br>34B | 陂水寒更淥<br>○○○○綠 |
| 2<br>3 | 27-<br>07A | 永州韋使君新堂記<br>註：刺史韋彪。 | 5<br>3 | 33-<br>17A | 震駭左右<br>○×○○ | 8<br>3 | 43-<br>35B | 啾啾飲食滴與粒<br>嘍○○○○○○ |
| 2<br>4 | 28-<br>03B | 於江，公……論也<br>××，××××× | 5<br>4 | 33-<br>18B | 十年之相知<br>○○○×○ | 8<br>4 | 43-<br>35B | 睢盱大志小成遂<br>○○志大○○○ |
| 2<br>5 | 30-<br>02B | 豈有賞哉<br>×××× | 5<br>5 | 33-<br>19A | 更以賀也<br>○×○○ | 8<br>5 | 43-<br>38A | 跂烏詞<br>跛○○ |
| 2<br>6 | 30-<br>03A | 荒陬中少士人女子<br>○隅○×○○×× | 5<br>6 | 33-<br>19A | 僕近亦好作文<br>○○×○○○ | 8<br>6 | 43-<br>44A | 縹帙各舒散前後互相逾<br>褾○○散後得失互○○ |
| 2<br>7 | *30-*<br>*12A* | 甲乙科第<br>○×○× | 5<br>7 | 34-<br>01B | 乃知煩陽公<br>○×○○○ | 8<br>7 | 43-<br>44B | 倦極更倒臥<br>○○便○○ |
| 2<br>8 | *30-*<br>*12B* | 少得知文章利病<br>○○×○○○○ | 5<br>8 | 34-<br>04B | 勿得私之<br>○×○○ | 8<br>8 | 43-<br>47B | 千金奉短計<br>○○○○策 |
| 2<br>9 | *30-*<br>*12B* | 出十數篇書<br>○○○○× | 5<br>9 | 34-<br>11A | 樹勢使然也<br>○○×○○ | 8<br>9 | 43-<br>47A | 蒼卒反受誅<br>○○乃○○ |
| 3<br>0 | *30-*<br>*12B* | 彼古人亦人耳<br>○××○○○ | 6<br>0 | 34-<br>14A | 秀才時見咨<br>○○○○客 | 9<br>0 | 43-<br>48A | 臺觀皆焚污<br>○○○瀦○ |
| 上＝鄭本正文；下＝「重校：韓本作」。巻葉*斜体*は補配葉、A本拠鄭本。03は「添注」に見える。89は「重校」「添注」なし。 | | | | | | 9<br>1 | 外下<br>02A | 畫界封疆<br>封疆畫界 |

＃64の巻34「報袁君陳秀才避師名書」14B「不於異書」下に「重校：韓“於”作“于”」という。鄭定の校勘は極めて細心なものであったことが知られる。

特徴一：鄭引韓本は巻35から巻38にかけて引かれていないが、その中の巻37「表慶賀」・巻38「表」には他人の作の誤収が多く、永州本では「外集」に収める。この点からは永州本に近い一本のように推測されるが、しかし＃91は「外集」巻下の「為文武百官請復尊號表六首」其一に見え、この作は崔元翰

の作にして永州本には収めないから[33]、やはり沈晦四五巻本系統に属すのではなかろうか。

特徴二：＃18は「送元暠師序」の題下註であり、「重校：韓本「送玄舉師歸幽泉寺序」在此下」とあるから鄭引韓本は魏本等の四五巻本系統とは編次が異なる。永州本では「送元暠師序」は巻17「序中」にあり、「送玄舉師歸幽泉寺序」は巻18「序下」で「送方及師序」の後、「送序」類の最後に置かれているから[34]、永州本とも異なる。

特徴三：鄭引韓本は沈晦四五巻本系統にありながら魏本系統とはかなり異なるものであった。先にも触れたように、南宋では四五巻本が最も流布していた。趙希弁『讀書附志』（淳祐九年1249）[35]に

> 『柳先生文集』四十五巻、『外集』二巻、『附録』二巻：希弁所藏卷帙與劉禹錫四十五通之說同，以諸本點校，寫諸公評論於逐篇之上。『附錄』中先後失次者正之，遺缺者補之。若夫昌黎所作先生「墓志」「祭文」，他本皆在『附録』中，惟此本在「正［貞］符」之後，蓋（劉）禹錫自謂附於第一通之末也。朱文公嘗謂："『柳文』後「龍城雜記」，王銍（字）性之所為也。"

という一本も沈本の系統であるが「附録」を有しており、それは作品の補遺であるが、韓醇の新編補遺1巻（収録5篇）とは異なる。また、「龍城録」は『直齋書録解題』が挙げる

> 『柳先生集』四十五巻、『外集』二巻、『別録』一［二］巻、『摭異』一巻、『音釋』一巻、『附錄』二巻、『事跡本末』一巻。……『別録』而下，皆嶠所裒集也。『別録』者，「龍城録」及「法言注」五則。「龍城」，近人偽作。

の一本では「別録」に収められており、それとは別に「附録」2巻があった。南安軍知軍葛嶠が「龍城録」を加えたものであるというが、趙希弁所蔵本には『摭異』『事跡本末』等がなく、明らかに別の一本である。葛嶠刊本は多くを附録しているから、趙希弁所蔵本よりも後に成ったものではなかろうか。沈晦四五巻本は南宋に至って韓醇本・眉本・劉本の系統だけでなく、多岐に分かれており、鄭引韓本はその中の一本である。

**02：邵武本＝紹興二六年（1156）**

鄭本は「邵武本」として次の3条を引く。

---

[33] 拙文「南宋永州刊『唐柳先生文集』三三巻本初攷」（『島大言語文化』39、2015年）。
[34] 拙文「南宋永州刊『唐柳先生文集』三三巻本初攷」（『島大言語文化』39、2015年）。
[35] 孫猛『郡齋讀書志校證』（上海古籍出版社2011年、p1171）。

| №. | 巻　葉 | 鄭　本 | | 鄭本重校 |
|---|---|---|---|---|
| 01 | 01-01A | 獻平淮夷雅表 | | 邵武本在三十八卷，却作「進平淮夷表」 |
| 02 | 02-05B | 韋佩賦 | 義師仁而惡很兮 | 邵武本無“惡”字。 |
| 03 | 43-33B | 田家（詩歌） | | 邵武本作「春懷故園」。 |

＃01について、邵武本がこの「表」を巻38に収めていたならば、それは四五巻本の系統に属す。四五巻本の巻38は「表」の類を収めるから、「雅」の作とそれを進上した際の「表」とを区別して巻01「唐雅」と巻38「表」とに分けて収めていたことになる。今、韓本が巻38に収め、しかも題を「進平淮夷雅表」に作るから、韓本と邵武本は四五巻本系統にあっても近い関係にあった。ただし韓本は「已見第一巻首」として本文を巻01に移し、題を「獻平淮夷雅表一首」に作る。今、『文苑英華』巻4がこれを収めて「進平淮夷雅篇表」に作る。沈本系統の標題は「平淮夷雅二篇幷序」に作るから、「篇」は衍字ではなく、むしろ鄭本あるいは邵武本の省字あるいは脱字かも知れない。韓本・邵武本の編次によれば、沈本は「表」である序文を巻38に、本文である「雅二篇」を巻1に、分けて収めていた可能性がある。

＃02について、現存本で「惡」字の無いものは、韓本を含み、見当たらない。

＃03について、「重校」は「零陵早春」の後に編次されている「田家」詩下に置かれているが、何焯は「零陵早春」詩下に「邵武本作「春懷故園」」[36]という。何氏は「邵武本」を見たのではなく、鄭本に引くのに拠ったのであり[37]、また鄭本の一本が「零陵早春」詩下にあったのでもなく、その詩の下に置くべき註であるとの理解による。「零陵早春」詩は

　　問春從此去，幾日到秦原。憑寄還鄉夢，殷勤入故園。

と詠むもので、内容は「田家」ではなく、詩題「春懷故園」に合致する。しかし「春懷故園」と題する詩は別にあり[38]、

　　九扈鳴已晚，楚鄉農事春。悠悠故池水，空待灌園人。

と詠む内容はやはり詩題に合致する。しかしこの「春懷故園」詩は四五巻本の

[36] 何焯『義門讀書記』巻37「河東集下」（中華書局1987、p670）。

[37] 高平「論何焯的柳宗元研究」（『中國韻文學刊』24-04、2010年）に「何焯批注「河東集」，即以鄭定本為底本，并以為他本校之，這包括舊杭本、重校呂本、英華本、邵武本等多種版本」（p21右）というのは正確ではない。

[38] 呉文治『柳宗元集』・『柳宗元詩文十九種善本異文彙録』、尹占華等『柳宗元集校注』はこれに触れない。

巻43の末、つまり「古今詩」2巻の末尾に置かれており、その前には「省試觀慶雲圖詩」があるから、極めて不自然である。「省試觀慶雲圖詩」は諸本の註に「晏元獻家本有此詩，今附于此」とあり、これは沈晦の加えた註である。沈「後序」に「増入『請聽政第二表』……『省試〔觀〕慶雲圖詩』」とある。つまり沈本は本来「省試觀慶雲圖詩」で終っており、「春懐故園」一首はその後に拾遺され編入されたものである。鄭本の「邵武本」にはこれとの混同がある。あるいは邵武本系統の一本によって後人が補遺したのであろうか。

「邵武本」は、地名および時間の先後関係から考えて、張敦頤音釋本と見做してよかろう。張敦頤「韓柳音釋［辨］序」（紹興二六年1156）[39]に次のようにいう。

> 『韓文』屢經校正，往往鑿以私意，多失其真。余前任邵武教官日，會為讎勘頗備，悉并考正音釋，刻於正文之下。惟『柳文』……今四明所刊四十五卷者是也。惟音釋未有傳焉，余再分教延平，用此本篇次撰集，凡二千五百餘字。

「邵武軍」は建寧府建陽県の南に隣接。張敦頤「音釋」本の底本も沈晦所刊の四五巻本であった[40]。沈晦はかつて知明州であった[41]。明州とは「四明」山に由来する。魏本の「柳集所收評論詁訓諸儒名氏」に「新安張氏：名敦頤，音辯」とあり、すでに魏本中に「張曰」として吸収されているが、魏本に「邵武本」という註は見えない。鄭本に魏本「張曰」以外の張註はないから、鄭本は新たに張敦頤音辯本によって校訂を加えたものと思われる。

**03：元符京本＝元符年（1098-1100）開封坊刻**

巻13「亡妻弘農楊氏誌」14B「雖間在他國」下に次のようにいう。

> 重校：元符京本“雖”下空一字。一無“間”字。

「元符京本」は沈晦「後序」に見え、沈晦四五巻本が用いた校本の中の一つ「小字三十三巻，元符間京師開行，顛倒章什，補易句讀，訛正相伴」である。単に京師という点、また校訂がなされておらず、明白な多くの誤りがあった点からみて、官刻ではなく、開封の書坊による坊刻本であろう。現存本『柳集』では、ただ劉本の「目録」の巻39「代裴中丞上裴相賀破東平狀」下に

---

[39] 『宋史』巻208「藝文志」に「張敦頤『柳文音辨』一卷」、陳振孫『直齋書録解題』巻15に「『韓柳音辨』二卷：南劍州教授新安張敦頤撰。紹興八年進士也」。

[40] 沈晦の序は魏本で「沈晦後序」、劉本「四明新本柳文後序」と題して「附録」に収める。

[41] 『宋史』巻378本伝。

依京本附此處。

と見える。これは劉本が「京本」を用いて校訂・編入したのではなく、底本であった四五巻本の沈晦の加えた校語にちがいない。北宋の元符京師本を校本の一つとして用いたのは沈晦であるから、四五巻本の祖本である穆修本には未収であった。他の四五巻本にこの校語は見えないが、いずれも「附此處」、この順序で編次されている。ただし南宋刊の永州三三巻本では同内容の作を「上裴相狀」に作り、巻 29「狀」の「上中書門下狀三首」の後に置く。「三首」は四五巻本の「賀中書門下誅淄青逆賊李師道狀」「賀中書門下平淄青後肆赦狀」「賀中書門下分淄青諸州為三道節度狀」に当たる。これも題名を異にするが、内容は同一であり、沈晦は京本に従ってこれを移した。これによって北宋の京本と南宋の永本は三〇巻本系統としてこの部分の編次が同じであったことが判明する。

その他、『文苑英華』所収の柳文中の校語にも「京本」4 条が見えるが[42]、『英華』巻 968「亡妻弘農楊氏誌」には見えず、また「雖間在他國」に作る。「京本」は李石「題柳文」にいう南宋初期の「京師閻氏本」とも考えられる。この「京師」は「京師閻氏」と「臨安富氏」と区別した表現から見て、南宋の臨安ではなく北宋の開封を指す。富氏蔵連州本・晏氏本（蜀本）・范才叔家伝本に比べて「閻氏本最善」とは沈晦のいう「元符間京師開行」本の特徴と合わないから「京師閻氏本」の系統なのであろうか。『英華』にいう「京本」も北宋本ならば、「元符京本」と同一本と考えるべきであろうが、すでに分岐していた可能性もある。蜀に伝わっていた晏氏本もそのような一本である。「元符間」は北宋・哲宗の年号（1098-1100）。沈晦本は徽宗・政和四年（1114）刊行であるから「元符京本」原刻本に拠っているであろうが、鄭本は南宋・嘉定十四年（1221）頃の成立であり、120 年以上を経ている。「代裴中丞上裴相賀破東平狀」は『英華』に収めず。晁公武『郡齋讀書志』（淳熙七年-十四年 1187）巻 17 にいう「柳宗元三十卷、集外文一卷」[43] もその系統である。

---

[42] 呉文治『柳宗元集』・『柳宗元詩文十九種善本異文彙録』、尹占華等『柳宗元集校注』に至っても中華書局影印本（隆慶刊本を嘉泰四年（1204）刊本で補足）を用いるのみ。新海博士は周到であり、すでに隆慶刊本の他に「静嘉堂文庫蔵の明鈔本により点検、篇目・本文にわたる校語一百八十三個所を補正」（p168）されている。本稿では明鈔宋本四種に拠る傅増湘『文苑英華校記』全 10 冊（北京図書館出版社 2006 年）を用いた。凌朝棟『文苑英華研究』（上海古籍出版社 2005 年）「文苑英華源流圖」（p73）に詳しい。中華書局本に見えるものは 1 条（巻 780-13A）のみ、『校記』ではさらに巻 732-4A・5b、巻 732-11A。

[43] 孫猛『郡齋讀書志校證』（上海古籍出版社 2011 年、p880）。

**04：趙本＝紹熙二年（1191）**

巻 39-18B「為裴中丞上裴相乞討黄賊狀」に次のように見える。

重校：韓本摽曰：“趙本與「上裴相狀」合為一篇。”

韓醇本にこの註文は見えない。この条は「為裴中丞上裴相乞討黄賊狀」の前に「為裴中丞上裴相賀破東狀」と題する作があって趙本がこの二篇の作を「上裴相狀」と題する一篇として扱っていることを謂う。永州三三巻本が同内容の作を「上裴相狀」に作り、一篇とする。

鄭本には「趙本作」の他に「趙曰」という註が 2 条ある。この「趙」は同一人物に違いない。ただし混乱がある。一つは巻 22「送苑論登第後歸覲詩序」10B「左右圜視」下に

趙云：賈誼言“動一親戚，天下圜視而起。”圜視謂圜精（睛）正視也。

と見えるが、この葉はＡＩ両本とも缺葉であり、Ａ本は魏本系統によって補配しており、魏本は「趙云」を「趙曰」に作るが、魏本の拠る眉本では「孫曰」に作る。Ｉ本は劉本で補配しており、同文は見えない。また、原刻葉の巻 27「邕州柳中丞作馬退山茅亭記」05B「昭儉也」下にも

趙曰：桓二年『左傳』，臧哀伯之辭。

とあり、魏本にも同註が見えるが、眉本では「趙」を「孫」に作る。鄭本が魏本を踏襲した証である。このような原刻葉と補配葉の不一致箇所は他にも多い。

この「趙」が「孫」の誤、つまり孫汝聴註であるとしても、「趙本」は鄭本の重校のみに見え、しかも永州本と一致する。「趙本」として考えられるのは趙善愖である。知永州の趙善愖は紹熙二年（1191）に『柳文』を刊行する。いわゆる永州本であるが、乾道元年（1165）永州知州葉棠校刊の重刊本を趙善愖が重刊し、さらに嘉定元年（1208）永州知州汪樾が重ねて校刊[44]。これらの永州本は若干の校語を附すが基本的に無註白文本である。したがって「趙曰」にいう音釋の類は加えられていない。また、「邕州〔柳中丞作〕馬退山茅亭記」が『英華』に収める独孤及の作であることはすでに定説であり[45]、恐らく永州本には収められていない[46]。「趙曰」の「趙」は「孫」が正しく、「趙本」の「趙」と

[44] 拙稿「南宋永州刊『唐柳先生文集』三三巻本初攷」、『島大言語文化』39 号、2015 年。

[45] 『文苑英華』巻 824「馬退山茅亭記」。すでに清・陳景雲（1670-1747）『柳集點勘』が考証。また趙懐玉（乾隆五六年（1791）亦有生齋趙懐玉校刻本『毘陵集』）は『柳集點勘』を引かないが周到に考証。劉鵬・李桃『毘陵集校注』（遼海出版社 2006 年）巻 17（p380）に詳しい。

[46] 同じく沈晦四五巻本に属す詁本・劉本は「邕州馬退山茅亭記」に作って「柳中丞作」を欠く。

は同一人ではないとすれば、「趙本」の方は永州三三巻本との合致および時間上の先後関係から見て趙善慥刊本と考えてよかろう。ただし鄭定は趙本を直接参用しているのではなく、鄭引韓本を介して重校しているのであり、鄭引韓本は諸本を用いた校定本にして校語をも有していた。ならば鄭引韓本は紹熙二年（1191）後、嘉定十四年（1221）前の成立である。あらためて鄭引韓本の重要性が知られる。

『文苑英華』所収（鈔本を含む）の柳文中の校語に「永州本」「永本」計 12 条が見える。永州本は南宋において三回校正重刊されているが、新海博士によれば、『英華』校正本（嘉泰四年 1204）の「彭叔夏が校する永州本は葉桯刻本と見てよかろう」[47]。『英華』巻 731-13A「永本」、巻 732-4A「京本・永本」、11A「京本・永本」、11B「永本」、巻 780-13A「永本・京本」、巻 791-05B「永本」、巻 798-08A「依［永］本」[48]、巻 986-09B「永本」、巻 999-04B「永本」2 条、05A「永本」、巻 1000-06A「永州本」。先に挙げた「京本」4 条の内、3 条は「いずれも「永州本」と連繋している」[49] から、京本と永州本は同系統、三三巻本に近い。なお、『英華』中、永州本による校語は「送序」「祭文」の類に集中している。

**05：呂本＝未詳**

「重校」に引く校本に「呂本」なるものがある。計 7 条、下表の通り。

| 巻葉 | 鄭　本 | 重　校 |
|---|---|---|
| 42-32B | 朗州竇常員外寄劉二十八詩見促行騎走筆酬贈 | 呂本有“因以奉呈”四字。 |
| 42-40B | 青［清］水驛叢竹天水趙云余手種一十二莖 | 呂本“云”作“公”。 |
| 42-42A | 硯匣留塵盡日封 | 按：“留”，呂本作“流”。 |
| 42-50B | 疊前 | 呂、韓本“疊前”作“重荅”。 |
| 42-53B | 摘櫻桃贈元居士時在望仙亭南樓與朱道士同處 | 韓、呂、謝本“時在”已下並作小字注寫。 |
| 42-54A | 樓居況是望仙時 | “是”，呂作“植［值］”。 |
| 43-25B | 門有野田吏 | 呂作“田野”。 |

32B は、鄭本を見ている何焯も「重校：呂本有“因以奉呈”四字。按：四字

『英華』の「馬退山茅亭記」に近い。文中に「我仲兄」とあるのに拠って後人が「柳中丞作」を加えた。眉本に始まる。詁本に「柳中丞作」はないが、題下に「邕州公，名寛、字存諒。公嘗誌其墓誌」云々とあるのに拠って加えたものか。

47 「柳河東集の源流」（『柳文研究序説』汲古書店 1987 年、p175）。

48 明刊本は「依」、『校記』に鈔本は「永」に作る。

49 「柳河東集の源流」（『柳文研究序説』汲古書店 1987 年、p176）。

當有，末二句乃呈劉也」[50] というように、4 字を有する方が原文に近い。

40B は明らかに文字形近に因る誤で、呂本がよい。「公」ならば下の「余」は衍字ではなかろうか。「趙」以下は原註であり、小字に作るべきである。

42A は同音による誤。文意上、「留」字が適当である。

50B は次詩に「疊前」とあるから「疊前」に合うが、この二首は先に劉禹錫に送った「殷賢戲批書後寄劉連州并示孟崙二童」詩に劉が「醻家雞之贈」詩を送り、さらに柳が「重贈二首」したものであるから、「重荅」に作っていた可能性もある。

53B は明らかに「摘櫻桃贈元居士」が詩題であって「時在望仙亭南樓與朱道士同處」は「小字注寫」の原註である。

54A は、鄭本（ＡＩ両本）の「植」字は「値」の誤りであり、さらに「是」も「値」との形近による誤りであろう [51]。

25B は、「田野」か「野田」か決し難いが、おそらく下字の異同と関係がある。下字は何焯が「“吏”疑“更”。『列子』有“田更商丘開”[52] 之文，即“叟”字分書也」[53] と指摘する。「種仙靈毗」詩に

> 杖藜下庭際，曳踵不及門。門有野田吏，慰我飄零魂。及言有靈藥，近在湘西原。服之不盈旬，蹩躄皆騰騫。笑抃前即吏，為我擢其根。

という二箇所の「吏」は、文脈上、胥吏ではなく、「田父野老」の類であり、「更」は長老の敬称に違いない [54]。

総じて呂本は『柳集』の原文に近く、極めて貴重な一本である。では「呂」とは誰なのか。魏本の「諸儒名氏」に挙げる宋人の呂氏は三名、「東萊呂氏：名本中，字居仁，議論」、「東萊呂氏：名祖謙，字伯恭，議論見『文集』」、「鶴山呂氏：名東，字伯陽，校正韓柳文」。眉本の「諸儒名氏」にはこの前者二名が見える。鄭本には「呂曰」形式の音釋はなく、いずれも「重校」に挙げるか

---

[50] 『義門讀書記』巻 37「河東集下」（p666）。

[51] 尹占華『柳宗元集校注（8）』の「校記」（p2885）に「何焯校本：“是”，疑當作“値”」というのがよい。『義門讀書記』巻 37「河東集下」（p668）には見えず、おそらく『柳宗元集校注（1）』の「整理説明」に挙げる「何焯批校『王荊石先生批評柳文』，簡稱何批王荊石本」（p6）であろうか。北京図書館蔵、未見。

[52] 『列子・黄帝』に「宿於田更商丘開之舍」。

[53] 『義門讀書記』巻 37「河東集下」（p669）。

[54] 『禮記・文王世子』に「遂設三老五更，羣老之席位焉」、鄭玄注に「三老五更，各一人也。皆年老更事致仕者也。天子以父兄養之，示天下之孝悌也」、また『禮記・樂記』に「食三老五更於大學」。

ら、「呂本」とは呂東校正本ではなかろうか。また、呂本中（1084-1145）、呂祖謙（1137-1181）が南宋初期の人であり、「諸儒名氏」ではその後の黄唐と蔡夢弼との間に列せられている。黄唐は『柳文雌黄』の撰者で高宗紹興から寧宗慶元の間に活躍、蔡夢弼は建安の書坊で、孝宗乾道から寧宗嘉泰の間に活躍。呂東も孝宗朝から寧宗朝の間の人であろう。呂東についてこれ以上のことは未詳である。「校正韓柳文」というが、魏本『韓集』の「諸儒名氏」の方にはその名は見えない。ただし呂本は音釋本でない点の他に、異文がいずれも詩歌に見られるという点に特徴がある。『柳集』四五巻本では巻 42・巻 43 が「古今詩」。詩歌での集中は呂本の性格と無関係ではなかろう。つまり詩歌でこれほどの異文があれば詩歌以外にもあってよいのだが鄭本でそれが指摘されていないということは、呂本は詩歌に限定した一本ではなかったか。『直齋書録解題』によれば[55]、当時、詩歌 145 首を収める『柳宗元詩』一巻が存在した[56]。「在全集中不便於觀覽，因鈔出別行」というのみであり、呂本と同じく註釋本でないことは推測されるが、編刊者は未詳である。かりにその『詩』本であるとすれば、もとの「全集」も異文を相当含む一本であったに違いない。

**06：蜀本＝未詳**

鄭定の校本に「蜀本」と呼ばれる一本がある。計 4 条。

| №. | 巻葉 | 正　　文 | 蜀 | 韓 | 眉 | 魏 | 劉 | 韓 | 邵 | 鄭 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 01 | 01-01A | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | | ○ |
| | | 重出在三十八巻。 | ○ | △ | | | | | ○ | |
| 02 | 01-21B | 斥余吾。 | | ○ | ○ | ○ | ○ | | | ○ |
| | | 并余吾 | ○ | | | | | | | |
| 03 | 23-07A | 不求獲乎己，而已以有獲。 | | ○ | ○ | ○ | ○ | | | ○ |
| | | 不求獲　　，而已以有獲。 | ○ | | | | | | | |
| | | 不求獲　　而已　有獲”。 | | | | | | ○ | | |
| 04 | *25-12A* | 充乎己　居，或以匱　已之虚，或盈其廬 | | | ○ | ○ | ○ | | | ○ |
| | | 充乎己　居，或以匱　已之虚，或盈其廬 | ○ | | | | | | | |
| | | 充乎己之居，或以匱乎己之虚，或盈其廬 | | ○ | | | | | | |

＃02 は「重校」ではなく、「添註」とする。「“斥”一作“并”。添註：蜀本作“并

[55] 『直齋書録解題』巻 19（徐小蠻点較、上海古籍出版社 1987 年，p564）。

[56] 拙文「韓醇《詁訓唐柳先生文集》南宋刊本初攷」（『孫昌武教授八十華誕紀念文集』、天津・百花文藝出版社 2016 年）。

［并］”」とあり、「并」に作る一本の存在をつげる魏本の註に対して添註でそれを証する。「“斥”一作“并”」の条は眉本・韓本や劉本にも見えるから、それらに共通する早期の旧註であり、沈晦の校註ならば校本として用いた京本・曽丞相家本・晏元献家本のいずれかの中にあった[57]。一説に、孫汝聴本・韓本・眉本が「斥」に作ることから蜀本を劉崧本とするが[58]、その根拠を知らない。「諸儒名氏」に「眉山劉氏：字崧」とあることに拠ったとしか考えられないが、注解が引かれている孫汝聴・王称も眉山つまり蜀の人であり、しかも劉（崧）註は魏本にも引かれている。

＃04は缺葉であり、Ａ本は拠鄭本影鈔、Ｉ本は拠劉本影鈔、Ｂ本もこの巻を有するがこの葉は缺落無補。

では「蜀本」とは何か。その呼称からみて蜀中刊刻の一本である。韓本・眉本や李石本・孫（汝聴）本等々、いずれも蜀本といえるが、実際に南宋で「蜀本」と呼ばれた『柳集』は少なくない。

1：劉崧本。一説に＃01の「蜀本此表重出在三十八卷」について「蜀本」を孫汝聴本か劉崧本とする[59]。確かに孫汝聽本を使っているが、その場合は「孫本」という。劉崧本とすることについては前述の眉山出身であること以外に根拠未詳。

2：韓醇詁訓本。鄭本のいう「韓本」に当たらないことは前述したが、これを「蜀本」と呼ぶこともある。『韓集』について方崧卿『舉正』がいう「蜀人韓仲韶本」（1条）[60]を朱熹『考異』が「蜀本」と換言しているのがそうである。韓醇、字は仲韶。しかし鄭本重校「蜀本」4条中、合致するものは皆無、近いものが1条しかない。なお、方崧卿が「蜀本」と呼ぶものは韓醇本のみではない。

3：范氏校刊本。魏本が附録する李石「河東先生集題後」に次のように見える。

---

[57] 沈晦「後序」に「凡四本。大字四十五卷，所傳最遠，初出穆修家，云是劉夢得本；小字三十三卷，元符間京師開行，顛倒章什，補易句讀，訛正相半；曰曽丞相家本，篇數不多於二本，而有「邢郎中」、「楊常侍」二行状、「冬日可愛」、「平權衡」二賦，共四首，有其目而亡其文；曰晏元獻家本，次序多與諸家不同，無『非國語』。四本中晏本最為精密」。

[58] 岳珍「宋刊《重校添注音辯唐柳先生文集》考述」（『湖南科技學院學報』2010-1）に「按：孫汝聽本、韓醇本、百家注本均作“斥余吾”，此引“并余吾”必為劉崧本」（p28右）。

[59] 岳珍「宋刊《重校添注音辯唐柳先生文集》考述」（『湖南科技學院學報』2010-1）に「此引“蜀本”，必為孫汝聽本或劉崧本」（p28左）。

[60] 劉真倫『韓愈集宋元傳本研究』（中国社会科学出版社2004年、p306）。

石所得柳文凡四本：其一得之於鄉人蕭憲甫，云“京師閻氏本”；其一得之於范衷甫，云“晏氏本”；其一得之於臨安富氏子，云“連州本”；其一得之於范才叔之家傳舊本。閻氏本最善，為好事者竊去。晏氏本，蓋衷甫手校以授其兄偃刊之，今蜀本是也。才叔家本，似未經校正篇次，大不類富氏連州本，樸野尤甚。今合三本校之，以取正焉。如劉賓客序云：“有退之之「誌」并「祭文」，附于第一通之末。”蓋以退之重子厚敘之意云爾也。蜀本往往只作「并祭文」，其他有率意改竄字句以害義理者尚多。

「蜀本」とは、范衷甫が校定、兄の范偃が刊刻したもので[61]、もとは晏氏本の系統に属し、それは沈晦によれば「四本中，晏本最為精密」であった。

4：李石本。范氏校刊本は李石本中に反映されているが、李石本は今に伝わらない。ただし鄭本には李石註5条が引かれており[62]、全て魏本の踏襲である。後に鄭定はこれを入手して蜀本と称したことも考えられなくはない。

5：『文苑英華』校本の一つ。『英華』所収の柳文の校語中に「蜀本」「蜀集」が見える。計51条。『唐文粹』に次いで主要な校本であった。鄭本の「蜀本」は4条と少なく、かついずれも『英華』のそれと合致しない。新海博士は李石本を『英華』で「彭叔夏の校する蜀本はこれか」と推測される[63]。『英華』での「蜀本」は「送序」「記」「墓誌」に集中している。

6：所謂「蜀刻唐六十家集」の一つ。『直齋書録解題』巻16の『王右丞集』下に[64]

建昌本與蜀本次序皆不同，大抵蜀刻『唐六十家集』多異于他處本，而此集編次尤無倫。

という。今日、『孟浩然詩集』『孟東野集』『陸宣公文集』等19種の現存本が比定されているが[65]、唐の「六十家」ともなれば当然、柳宗元もその数に入っていたはずである。ちなみに『韓集』について『解題』は「『昌黎集』四十巻、『外集』一巻、『附録』五巻、『年譜』一巻、『擧正』十巻、『外鈔』八巻」[66]で

---

[61] 拙文「簡州石刻柳宗元「永州八記」再考——その底本と宋代蜀本「柳集」の系統」『島大言語文化』29、2010年。

[62]「李石曰」1条（34-06A）、「李曰」4条（22-06A、34-03A、35-05B、42-42A）。

[63] 新海一「柳河東集の源流」（『柳文研究序説』汲古書店1987年、p174）。

[64] 徐小蛮・顧美華点校『直齋書録解題』（上海古籍出版社1987年、p468）。

[65] 程有慶「宋蜀刻『唐六十家集』版本考辨」（『四川圖書館學報』2012年2期）。

[66] 徐小蛮・顧美華点校『直齋書録解題』（p475）。

『外集』但據嘉祐蜀本劉煜［燁］[67] 所録二十五篇，而附以石刻、聯句、詩文之遺見於他集者。

と解説する。劉燁所録や遺文等の『外集』を有していた「嘉祐蜀本」なる『韓集』は、方崧卿『韓集舉正』末「舉正敘録」中の「嘉祐蜀本」条および『新刊經進詳註昌黎先生文』[68] に附す『韓文公志』巻 3 の蘇溥「書文集後」（「嘉祐六年六月」）に詳しく見える、蘇溥が「嘉祐六年」（1061）に刊行した一本である [69]。「蜀刻唐六十家集」にはいわゆる「十二行本」が多く [70]、『韓集』にも「翰林國史院官書」元朝官印を有する宋刊『昌黎先生文集』十二行本が現存するが [71]、一説に光宗・紹熙（1119-1194）坊刻の蜀本であり、蘇溥「嘉祐蜀本」に淵源するという [72]。蘇溥「書文集後」を収める『新刊經進詳註昌黎先生文』がその系統にあるならば、刻工名から「南宋中期成都眉山地區刻本」[73] と鑑定されている点、また乾道二年（1166）文讜「進詳註昌黎先生文表」、紹興十九年（1149）文讜「詳註昌黎先生文集序」を有する点において、本稿のいう眉本すなわち『新刊増廣百家詳補註唐柳先生文』も主要註家が文讜「詳註」・王儔「補註」であるから [74]、「蜀刻唐六十家集」の系統にあると考えられるが、しかしこれも鄭本のいう「蜀本」とは一致しない。

鄭本の「蜀本」を李石本、『英華』のいう「蜀本」を「蜀刻唐六十家集」本と考えたいが、現時点では確証を得ない。あるいは、『解題』が挙げる『柳集』は三本、その内、一本が鄭本、一本が南安軍葛嶠刊本であり、残る一本「『柳柳州集』四十五巻、『外集』二巻」が「蜀刻唐六十家集」の一つとしてあったであろう『柳集』の「蜀本」あるいはその系統であろうか。

---

[67] 校註に「元抄本、盧校本「劉煜」作「劉燁」」（p476）。方崧卿「韓集舉正敘録」（宋版『韓集舉正』（汲古書院 2002 年影印、p381））の「嘉祐蜀本」条でも「劉燁」、蘇溥「書文集後」（『新刊經進詳註昌黎先生文』附録）も「龍圖燁所増修本」に作る。

[68] 北京図書館蔵 #882、『宋蜀刻本唐人集叢刊（40）』（上海古籍出版社 1994 年）所収。

[69] 劉真倫『韓愈集宋元傳本研究』（中国社会科学出版社 2004 年）「嘉祐蜀本」（p258）に詳しいが、『直齋書録解題』にいう「嘉祐蜀本」の記載は挙げられていない。また同書「南宋蜀刻十二行本『昌黎先生文集』考述」では「蘇溥刊刻于嘉祐八年（1063）」（p129）としており、二年のズレがある。

[70] 李致忠「張承吉文集跋」（『宋蜀刻本唐人集叢刊（18）』）。

[71] 北京図書館蔵＃ 7897。『宋蜀刻本唐人集叢刊』（上海古籍出版社 1994 年）所収。

[72] 劉真倫『韓愈集宋元傳本研究』「南宋蜀刻十二行本『昌黎先生文集』考述」（p134、p141）。

[73] 陳杏珍「新刊經進詳註昌黎先生文跋」（『宋蜀刻本唐人集叢刊（40）』所収、2A）。

[74] 魏本『柳集』・魏本『韓集』に文讜・王儔の名は、陳杏珍「新刊經進詳註昌黎先生文跋」（『宋蜀刻本唐人集叢刊（40）』所収、3A）、呉文治『柳宗元集』（中華書局 1979 年）「校點後記」（p1504）にいうように、ともに見えないが、しかしその註は採られている。

### 07：謝本＝未詳

「重校」に引く校本に「謝本」がある。計 4 条。

| No. | 巻葉 | 鄭　本 | 重　校 |
|---|---|---|---|
| 01 | 08-16B | 關於政教，聲聞王者。 | 謝本無“聲聞王”三字。 |
| 02 | 42-53B | 摘櫻桃贈元居士時在望仙亭南樓與朱道士同處 | 韓、呂、謝本“時在”已下並作小字注寫。 |
| 03 | 外 2-02B | 逋賦蒙勿收之惠 | 謝本“逋”作“通”。 |
| 04 | 外 2-17A | 澧州刺史裴冕忠肅 | 謝作“忠肅明允”，一作“明允忠肅”。 |

＃ 03 の謝本の内容は、現存本の中では韓醇本と、＃ 04 の「一作」は永本「外集」、『英華』と一致する。

その他、巻 34「復杜温夫書」21B「何吾生胷中擾擾焉多周、孔哉」下に

補注：謝昌國曰：“子厚之論正矣，然以史考之，方子厚與劉夢得附王叔文也，……溫夫安得而周、孔之哉。

という謝昌国の長文の議論が一条引かれている。ただしこの「補注」は魏本に、さらに眉本にも見え、魏本・眉本の「諸儒名氏」に

謝氏：名諤，字昌國，議論見『語録』。

というその人である。謝諤（1121-1194）は程頤再伝の弟子で、著書は頗る多いが、伝存するものは少なく、『語録』なるものも知られていない[75]。今これに拠って拾遺できる。また、『韓集』を校正した人に北宋末の謝克家（?-1134）がいるが[76]、「諸儒名氏」にも見えず、『柳集』の校正では知られていない。「謝本」の「謝」と同一人物かどうか、共に確証を欠く。

### 08：晁本＝晁補之（1053-1110）『續楚辭』『變離騷』

「晁作～」も校註の一つであるが、「添註」に多い。

| | | | |
|---|---|---|---|
| 巻 2 | 「閔生賦」 | 16A「蹶泥」 | 添註：“蹶”一作“厥”；晁作“蹷”。 |
| | 「夢歸賦」 | 19B「纚纚以經耳」 | 添註：一作“釃釃”；晁作“纚纚以驚耳”。 |
| | | 03B「恍惘」 | 添註：晁作“洸洸”。 |
| | | 03B「汪浪」 | 添註：晁作“浪浪”。 |
| | | 03B「黔漠」 | 重校：晁作“黔漠”。 |

[75] 『宋史』巻 389 本伝、周必大『文忠集』巻 68（『平園續』28）「朝議大夫工部尚書贈通議大夫謝公（諤）神道碑」、楊万里「謝公神道碑」（『誠齋集』巻 121）によれば『艮齋集』40 巻（『文集』100 巻）、『論語解』20 巻、『詩書解』20 巻、『春秋左氏講義』3 巻（『經解』43 巻）、『柏臺奏議』5 巻、『諫垣奏議』5 巻（『奏議』10 巻）、『孝史』50 巻、『性學淵源』5 巻、『雑著』20 巻、『經筵總録』3 巻。『全宋文（220）』巻 4872「謝諤」（p18-45）。

[76] 劉真倫『韓愈集宋元傳本研究』（中国社会科学出版社 2004 年、p291）。

これらの「晁」は晁補之を指すと考えて間違いない。いずれも「賦」の作中の異文をいうものであり、巻2「懲咎賦」題下註に「財［補］註：晁太史取此賦於『續楚詞』，序曰：宗元……」、巻2「囚山賦」題下註に「補註：晁太史無咎序公此賦於『變騷』曰：……」というように、晁補之（1053-1110）、字は無咎の編『續楚辭』20巻・『變離騷』20巻の所収に拠った校語である[77]。北宋にあっても沈晦本（政和四年1114）以前の系統を反映する点において貴重であり、また晁補之『雞肋集』巻36に「續楚辭序」「變離騷序」を収めるが、『續楚辭』『變離騷』はすでに佚書であり[78]、この点においても貴重である。

晁本は伝存しないが、ただ朱熹（1130-1200）が最晩年に『楚辭集注』8巻を編集した際、晁補之の編を斟酌取捨して『楚辭後語』6巻を加え、巻5に柳文「招海賈文」「懲咎賦」「閔生賦」「夢歸賦」「弔屈原文」「弔萇弘文」「弔樂毅文」「乞巧文」「憎王孫文」の9篇を収めており、『楚辭後語』の方は南宋刊本や元覆宋本が今日に伝存する[79]。今、先の「閔生賦」「夢歸賦」二作5例を『後語』所収と照校してみれば、多くが晁本と合致する。ただし現存の南宋・元刊本の間には異同があり、「添註」さらに「重校」を除いてもなお異文が知られる。

鄭定の校註は時に微細な差異にまで及ぶが、「晁作」5例についていえば、＃02「蹙」は「蹶」の異体字にすぎない。また、＃18「黔」は「黯」の誤記ではなかろうか。ならば5例はすべて『楚辭後語』と一致し、この限りでは『楚辭後語』は晁補之本と同じであるが、＃01・＃07・＃14・＃22に相違がある。

『楚辭後語』所収作は、朱熹の校正を経ているであろうが、南宋時に諸本存在した中で『楚辭後語』と『續楚辭』『變離騷』のみに共通する異文が存在す

---

[77] 『直齋書録解題』巻15「『重定楚辭』十六卷、『續楚辭』二十卷、『變離騷』二十卷：禮部郎中濟北晁補之無咎撰。去「九思」一篇入『續楚辭』，定著十六卷，篇次亦頗改易，又不與陳説之本同」。

[78] 姜亮夫『楚辭書目五種』（上海古籍出版社1960年、p404）。

[79] 朱熹の子・朱在「跋」（端平刊本）に「『後語』六卷、至嘉定十年丁酉（1217）始刊行」。姜亮夫『楚辭書目五種』、黄靈庚点校『楚辭集注』（上海古籍出版社2015年、p400）によれば、嘉定刊本は『辯證』のみ現存（台湾・中央図書館）、『後語』を有するものに、宋元本では端平刊本の他に、咸淳三年（1267）向文龍刊本（明・蔣之奇重刻本：端平刊『楚辞集注』1953年影印本の鄭振鐸跋に見える）、元・至元二年（1336）建安傅氏刊本（民国二〇年（1931）掃葉山房影印：原刻本は北京図書館蔵）、至正二三年（1363）高日新刊本（『景元刊本楚辞集注』（線装書局2001年「用熹孫朱鑑宋理宗端平乙（二年1235）未刊本校」、『楚辞後語』の「目録」後に牌木「歳在癸卯孟春高日新宅新刊」）があり、その他に元・天暦三年（1330）陳忠甫宅刊本（台湾・中央図書館蔵）などがある。端平刊本は端平二年（1235）朱鑑刊『楚辭集注』8巻『辯證』2巻『後語』6巻、人民出版社1953年影印北京図書館蔵本（中華書局1963年重印）、中華再造善本、上海古籍出版社1979年（李慶甲校点）。

| No. | 柳宗元「閔生賦」「夢歸賦」 | | | | 朱熹『楚辭後語』 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 眉本 | 魏 | 鄭本 | | | | |
| | 正文 | | | 「晁作」 | 端平本 | 天曆本 | 至正本 |
| 01 | 斥謬 | | | | 斥繆 | 斥繆 | 斥繆 |
| 02 | 蹶泥 | | | 蹷泥 | 蹶泥 | 蹶泥 | 蹶泥 |
| 03 | 高嵒 | | | | 高巖 | 高嵒 | 高嵒 |
| 04 | 揚氛 | 楊氛 | | | 揚氛 | 揚氛 | 揚氛 |
| 05 | 誰隣 | | | | 誰鄰 | 誰鄰 | 誰鄰 |
| 06 | 暮言 | | | | 謨言 | 暮言 | 暮言 |
| 07 | 明神 | | | | 神明 | 明神 | 明神 |
| 08 | 騰踴 | | | | 騰踴 | 騰踴 | 騰踴 |
| 09 | 顥醇 | | | | 顥醇 | 顥純 | 顥純 |
| 10 | 經耳 | | | **驚**耳 | 驚耳 | 驚耳 | 驚耳 |
| 11 | 于以 | | | | 於以 | 於以 | 於以 |
| 12 | 衝飈 | | | | 衝飆 | 衝飆 | 衝飆 |
| 13 | 牙 | | | | 互 | 牙 | 牙 |
| 14 | 忽崩騫上下兮 | | | | 崩騰上下以徊徨兮 | 崩騰上下以恒惶兮 | 崩騰上下以恒惶兮 |
| | 晏本作“崩騫翔以上下徊徨兮”。 | | | | | | |
| | | | 重校：又作“忽崩騫翔以上下兮”，又作“崩騫上下徊徨兮” | | | | |
| 15 | 按行 | | | | 按衍 | 按衍 | 按衍 |
| 16 | 恍惘 | | | **洸**洸 | 洸洸 | 洸洸 | 洸洸 |
| 17 | 汪浪 | | | **浪**浪 | 浪浪 | 浪浪 | 浪浪 |
| 18 | 黝漠 | | | **黝**漠 | 黝漠 | 黝漠 | 黝漠 |
| 19 | 回互 | | | | 廻互 | 廻牙 | 廻牙 |
| 20 | 鍾鼓 | | | | 鐘鼓 | 鍾鼓 | 鍾鼓 |
| 21 | 精誠 | | | | 精誠 | 精神 | 精誠 |
| 22 | 三復 | | | | 往復 | 往復 | 往復 |

ることから、晁補之本に依拠していることはすでに明らかであり、南宋刊本『楚辭後語』と現存南宋本『柳集』とを再度綿密に対校すれば北宋本の異文がさらに得られるであろう。また、『續楚辭』『變離騷』所収の作には晁補之の序・繫辞がつけられており、『柳集』ではすでに眉本系統が「瓶賦」「解祟賦」「懲咎賦」「閔生賦」「夢歸賦」「囚山賦」「愚溪對」「晉問」「乞巧文」「罵尸蟲文」「憎王孫文」「宥蝮蛇文」「招海賈文」「弔萇弘文」「弔屈原文」「弔樂毅文」16 篇でそれを引いている[80]。ただしこれにも若干の異同があり[81]、『柳集』引用の方が原

[80] 『楚辭後語』所収の 9 篇にも見える。呉文治等『中國古典研究資料彙編 · 柳宗元巻』（中華書局 1964 年）には未収録。

[81] たとえば南宋刊『後語』の「夢歸賦」の「居治平」「故都」「廢不復」は、『柳集』引「晁氏曰」

文に近いと思われるものもある。北宋本の姿を伝えるものとしては『英華』所収が存在するが、『楚辭後語』や『續楚辭』『變離騷』の所収と重なるものは「答問」「弔屈原」「憎王孫」「罵尸蟲」「招海賈」のみであり、「閔生賦」「夢歸賦」等を収めない。『柳集』の校勘では『楚辭後語』も使用すべきであることを指摘しておく。

**09：一本**

以上が鄭本中で姓・地によって出自を示す校本であるが、わずか百余条に過ぎず、その五倍近くを有するのが「一本作」「一作」「一無」「一有」等の形式で示される一本である。「一本作」をいう校語は「添註」の中にも見える。これらの「一本」とは異本・別本を指すが、「一」は必ずしも実数ではなく、つまり特定の一書ではなく、一系統にある複数の書であって、複数本が一様にそのように作っていたために「一本」という表現をとったものであろう。逆にいえば、多数の校本の中で或る一本のみ異なっていた場合に限って「韓本」「蜀本」「呂本」「謝本」等、姓・地の略称をもって特記されたのである。「韓本」等の指名本に至っても相異する箇所が鄭本重校の指摘する数箇所から数十箇所のみであったとは考えにくい。それらを含む複数本が底本たる魏本と異なる場合、「一作」と総称した。つまり多くの場合、「韓本」等の指名本は「一本」の中に吸収されているわけである。

では、「一本」に含まれる、地・姓等を示した指名本以外の校本には如何なる書があったのか。複数本があったはずであり、やはり今日に知られていない貴重なものが存在する。たとえば巻 01-01A「獻平淮夷雅表一首」下に

　重校：一本此「表」在第五巻。蜀本此「表」重出在三十八巻。邵武本在三十八巻，却作「進平淮夷表」。

という註文は最も詳細である。恐らく、集の冒頭に在って最初の「重校」であるために丁寧な説明になったのであろう。今これによれば、この作を巻 05 に収めていた「一本」は巻 38 に収めていた蜀本・邵武本等とは全く異なる系統の本であった。それは三〇巻本の系統ではなかろうか。先の「京本」「趙本」もこれに属す。

また、巻 25-02A「送韓豐羣公詩後序」に

　重校：一無“群公詩”字。

---

ではそれぞれ「居治平世」「故郷」「廢不起」。

という。今日では永州本のみが巻18「序下」に収めて「送韓豐後序」に作る。鄭本では缺葉であり、A本は拠鄭本影、I本は拠劉本補刻、B本もこの巻を有するがこの葉を缺く。同様の例は多い。巻35-08B「上湖南李中丞干廩食啓」題下に

　重校：一無“干廩食”三字。

という。これも永州本巻30「啓」がまさに「上湖南李中丞啓」に作る。『英華』巻659は「與湖南李中丞啓」に作り、永州本に近い。なお、先の「送韓豐後序」は『英華』はこれを収めず。また、巻39-19B「為桂州崔中丞上中書門下乞朝覲狀」題下に

　重校：一本作「上宰相狀」。

というものも永州本巻29「状」が「為崔中丞上宰相狀」に作るのに近い。ちなみに鄭本ではこの「狀」中に「重校」が2条あるが、「丹誠」下に

　重校：“丹”一作“精”。

といい、永州本はまさに「精誠」に作っている。ただし「六歲來見」下に

　重校：“六”一作“七”。

とあるが、永州本は「六」である。「一本」の中には京本・趙本の他にも三〇巻本・三三巻本の系統があったはずであり、「重校」の中に反映されている。

いっぽう永州本・沈晦本ともやや異なる一本もある。穆修四五巻本は沈晦の拾遺によって「為文武百官請復尊號表六首」や「賀裴桂州啓」「與衛淮南石琴薦啓」「答鄭員外賀啓」「答諸州賀啓」が「外集」巻下に収められたが、鄭本は「尊號表六首」について

　重校：一本以上六「表」在『前集』。

といい、「賀裴桂州啓」等の「啓」四首についていずれも

　重校：一作“狀”，在『前集』。

という。「前集」とは「後集」に対する謂いであり、そのような称は一般的ではあっても『柳集』に存在したかどうか疑問が残る[82]。編次を意識した謂いとして、それらを収める「外集」に対していわゆる正集を指すと解してよかろう。今、永州本も沈本と所収を異にする「外集」を有するが、この「啓」四首を「外集」ではなく、巻30「啓」に、つまり正集の末巻に収める。鄭本のいう「在『前

[82] 劉本の陸之淵「柳文音義序」には「柳州内外集，凡三十三通」とあり、内集・外集が使われている。ただし、『朱文公校昌黎先生集』の『集傳』に収める『新唐書』本伝の朱熹註では『外集』を『後集』と呼んでいる、というような例もある。

集』」の巻第は不明であるが、「一本」は永州本と同じ編次であるとしても、永州本は「啓」であって「狀」ではなく、また永州本は「尊號表六首」を収めない。沈晦四五巻本と永州三三巻本との中間に在るような、編次・分類を異にする一本の存在が知られる。

## おわりに

最後に、鄭本について、あらためて指摘しておきたいことは、南宋・嘉定一四年（1221）嘉興軍鄭定刊本は国内外に多く残存しており、中でも台湾・中央図書館蔵本二本が足本であるが、補配の多い元明遞修本であり、また必ずしも鄭本によって影鈔・補刻されていないこと、しかしその補刻部分には今日知られていない註が見られること、さらに原刻部分では、魏本を底本としながら、今日亡佚の諸本、少なくとも八本を用いて校勘していること、その中でも韓醇詁訓本ではない韓本は極めて特殊な一本である、ということである。総じて鄭本の元明補修本は校勘および註文において最も多くの新資料を提供するものであり、その意味で缺葉の多い補刻本も看過できない。

鄭本遞修本の成立と諸本の関係をめぐっては、いささか推測を加えたが、まだ多くの未解決の問題を残す。そこで同仁・後学のために、鄭本研究の基礎資料として、鄭本Ａ・Ｂ・Ｉ本の現存葉・缺葉と補修状態を対照して示した一覧表を作成して、刻工名表と共に、提供しておく。なお、Ｉ本には乱丁があり、巻 20-09 と巻 21-09 が入れ換わっている。

| 鄭本刻工名とその略称 | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 陳斗南 CN | 陳　良 CL | 曹冠宗 CZ | 曹冠英 CY | 董　澄 DC | 丁日新 DR | 丁　松 DS |
| 高　文 GW | 高　寅 GY | 高　春 GC | 金　滋 JZ | 龐知德 PD | 劉　昭 LZ | 毛　端 MD |
| 繆　恭 MG | 馬　良 ML | 龐知柔 PR | 石　昌 SC | 吳　椿 WC | 吳　鉉 WX | 王　禧 WI |
| 王　顯 WN | 王　仔 WZ | 王　遇 WY | 徐安礼 XL | 徐　禧 XX | 朱　椿 ZC | 朱　梓 ZZ |
| 張待用 ZD | 鄭　錫 ZX | ■＝拠鄭本　●＝拠鄭魏本　▲＝拠劉本　★＝拠廖本　―＝空白葉 | | | | |
| 小文字 cz 等＝拠鄭本覆刻 ;「陳斗南」「陳南」「斗南」は一に「陳斗用」と判読[83]。王文進は馬文、金流、董澄［證］、張侍周［用］、龐知［初］柔に作る[84] | | | | | | |

＊本稿は JSPS 科研費 JP17K02644 の交付による研究成果の一部である。

[83] 阿部隆一『増訂中國訪書志』（汲古書院 1976 年、p553）。今、傅増湘『藏園羣書經眼録』、『周叔弢古書經眼録』、『國家圖書館善本書志初稿』（p134）に従う。

[84] 王文進『文禄堂訪書記』巻 4（上海古籍出版社 2007 年、p257）。

| 卷＼葉 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 | 23 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 陳序 | — | — | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | ▲ | ▲ | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 劉序 | ▲ | ▲ | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | ▲ | ▲ | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 姓氏 | — | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | ▲ | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 目録 A | □ | □ | □ | □ | □ | □ | □ | □ | □ | □ | □ | □ | □ | □ | □ | □ | □ | □ | □ | □ | □ | □ | □ |
| I | ▲ | ▲ | ▲ | ▲ | GW | GW | GW | GW | ▲ | ▲ | ?? | XL | ▲ | SC | ▲ | ▲ | ▲ | ▲ | ?? | ?? | ?? | ?? | ?? |
| B | — | — | — | — | GW | GW | GW | GW | — | — | ?? | XL | — | — | — | — | — | — | ?? | ?? | ?? | ?? | ?? |
| 1 | CZ | CZ | WZ | WY | ★ | WN | CL | CL | WY | WY | DS | DS | ★ | ★ | WZ | WZ | DS | DS | ★ | WN | CZ | CZ | MD |
| | CZ | CZ | WZ | WY | ▲ | *w n* | *cl* | *cl* | WY | WY | DS | DS | ▲ | ▲ | ▲ | ▲ | *ds* | DS | ▲ | WN | — | — | *md* |
| 2 | CZ | CZ | ★ | ★ | MG | MG | — | ZC | ZZ | ZZ | GW | GW | ZZ | ★ | MG | MG | ZC | ZX | GY | GW | SC | SC | DS |
| | CZ | CZ | ▲ | ▲ | MG | MG | ZC | ZC | ZZ | ZZ | GW | GW | ▲ | ▲ | MG | MG | ▲ | ZX | GY | GW | SC | SC | DS |
| 3 | CZ | CZ | GW | GY | MG | MG | WY | WY | PR | PR | ZZ | ■ | — | MD | SC | MD | ● | ● | GW | ■ | WN | WN | GC |
| | ▰ | ▰ | GW | GY | MG | ▰ | WY | WY | PR | PR | ZZ | ▲ | SC | MD | SC | MD | ▲ | ▲ | GW | ▰ | WN | WN | GC |
| 4 | MG | MG | ■ | ■ | DS | DS | ZZ | ZZ | ZC | GY | WI | WZ | WZ | WZ | XL | XL | ▲ | | | | | | |
| | ★ | ▰ | ▲ | ▲ | DS | DS | ZZ | ZZ | ZC | GY | WI | WZ | WZ | WZ | XL | XL | ▲ | | | | | | |
| 5 | ZC | ZC | CL | CL | MD | SC | ■ | ■ | WX | WX | GW | GW | GC | GC | ZX | ZX | XL | XL | ● | ● | WY | CZ | SC |
| | ZC | ZC | CL | CL | *md* | SC | ▲ | ▲ | WX | WX | GW | GW | GC | GC | ZX | ZX | XL | XL | ▲ | ▲ | WY | CZ | SC |
| 6 | ZZ | ZZ | ZZ | ZZ | PR | PR | ZC | ZC | GC | GC | DS | DS | | | | | | | | | | | |
| | ZZ | ZZ | ZZ | ZZ | PR | PR | ZC | ZC | ★ | ★ | DS | DS | | | | | | | | | | | |
| 7 | ZD | ZD | WI | WZ | CL | CL | ZD | ZD | MG | MG | ZZ | | | | | | | | | | | | |
| | ZD | ZD | WI | WZ | CL | CL | ▰ | ▰ | MG | MG | ZZ | | | | | | | | | | | | |
| 8 | ZX | ZX | CN | CN | ZD | ZD | CL | CL | WN | WN | WI | WZ | PR | PR | XL | XL | GC | GC | GY | GY | GC | MG | WZ |
| | ZX | ZX | CN | CN | ZD | ZD | CL | CL | WN | WN | WI | WZ | PR | PR | XL | XL | GC | GC | ▰ | ▰ | GC | MG | ▰ |
| | ZX | ZX | CN | CN | ZD | ZD | CL | CL | WN | WN | WI | WZ | PR | PR | XL | XL | GC | GC | — | — | — | MG | — |
| 9 | MD | MD | ZC | ZC | GW | GW | ZC | ZC | ZZ | ZZ | SC | SC | WY | WY | MG | MG | CZ | WY | WX | WX | GC | GC | CZ |
| | MD | MD | ▰ | ZC | GW | GW | ZC | ZC | ZZ | ZZ | SC | SC | *WY* | WY | MG | MG | CZ | WY | WX | WX | GC | GC | CZ |
| | MD | MD | — | ZC | GW | GW | ZC | ZC | ZZ | ZZ | SC | SC | *WY* | WY | MG | MG | CZ | WY | WX | WX | GC | GC | CZ |
| 10 | CY | WY | CY | CY | WI | WZ | DS | DS | WZ | WI | GY | CY | ZX | ZX | XL | XL | ★ | ★ | CL | CL | MD | SC | SC |
| | CY | WY | CY | CY | ★ | WZ | DS | DS | WZ | WI | ★ | ★ | ZX | ZX | XL | XL | ▲ | CL | ★ | ▰ | MD | SC | SC |
| | CY | WY | CY | CY | ★ | WZ | DS | DS | WZ | WI | ?? | CY | ZX | ZX | XL | — | — | CL | CL | — | MD | SC | SC |
| 11 | WN | MD | WY | WY | SC | MD | DS | DS | PR | PR | ZY | ZY | WN | WN | WX | WX | CZ | WY | | | | | |
| | ▰ | ▰ | WY | WY | SC | MD | DS | DS | PR | PR | ZY | ZY | WN | WN | WX | WX | CZ | WY | | | | | |
| | — | — | WY | WY | SC | MD | DS | DS | PR | PR | ZY | ZY | WN | WN | WX | WX | CZ | WY | | | | | |
| 12 | ZZ | ZZ | CZ | WY | ZX | ZX | XL | XL | XL | XL | ZC | ZC | GC | GC | GC | GW | MG | MG | CY | CY | CL | CL | WZ |
| | ZZ | ZZ | CZ | WY | ZX | ZX | ▰ | ▰ | XL | XL | ★ | ★ | ★ | ★ | GC | GW | MG | *mg* | CY | CY | CL | CL | WZ |
| | ZZ | ZZ | CZ | WY | ZX | ZX | — | — | XL | XL | ZC | ZC | GC | GC | GC | GW | MG | *MG* | CY | CY | CL | CL | WZ |
| 13 | GW | GW | CZ | CZ | MG | MG | GC | GC | ZC | ZC | ZZ | ZZ | MD | SC | SC | SC | WX | WX | XL | XL | MG | ▲ | ▲ |
| | GW | GW | CZ | CZ | ★ | ★ | GC | GC | ZC | ZC | ZZ | ZZ | MD | SC | SC | SC | WX | WX | XL | XL | MG | ▲ | ▲ |
| 14 | CZ | WY | CY | CY | DS | DS | CZ | WY | ■ | CY | WY | WY | ZC | ZC | WX | ● | GW | GW | CZ | CZ | GC | GC | ZZ |
| | ▰ | WY | CY | CY | DS | DS | CZ | WY | CY | CY | WY | WY | ZC | ZC | WX | ▲ | GW | GW | CZ | CZ | GC | GC | ZZ |
| 15 | ZC | ZC | CY | CY | WY | CZ | XL | ZX | PR | PR | CZ | WY | XL | ZX | CN | CN | WI | WZ | WI | WZ | CZ | CZ | PR |
| | ZC | ZC | CY | CY | WY | CZ | XL | ZX | PR | PR | CZ | WY | XL | ZX | CN | CN | WI | WZ | WI | WZ | CZ | CZ | — |
| 16 | GC | GC | GC | GC | ZY | ZY | ZY | ZY | ZZ | ZZ | ZC | ZC | WC | GC | DS | DS | XL | XL | CL | ● | PR | PR | GW |
| | GC | GC | GC | GC | ▰ | ZY | ZY | ZY | ZZ | ZZ | ZC | ZC | WC | GC | DS | DS | XL | XL | CL | ▲ | PR | PR | GW |
| 17 | ZZ | ZZ | ZC | ZC | MG | MG | WZ | WI | WZ | WI | XL | XL | WZ | WC | | | | | | | | | |
| | *zz* | ZZ[ | ▰ | ZC | MG | MG | WZ | WI | WZ | WI | XL | XL | WZ | WC | | | | | | | | | |
| 18 | XX | ZX | XL | XL | MD | MD | MG | MG | SC | SC | WI | WZ | GW | GW | GW | GW | MG | MG | MG | MG | ZZ | ZZ | ZC |
| | XX | ZX | XL | XL | MD | ▰ | MG | SC | SC | SC | WI | WZ | GW | GW | GW | GW | MG | MG | MG | MG | ZZ | ZZ | ZC |
| 19 | WX | WX | WX | WX | GC | GC | ▰ | ▰ | XL | XL | ZX | ZX | ZY | ZY | ZY | GC | GC | XL | CL | CL | | | |
| | WX | WX | WX | WX | GC | GC | ▲ | ▲ | XL | XL | ZX | ZX | ZY | ZY | GC | GC | XL | CL | CL | | | | |
| 20 | DS | ■ | GC | GC | CL | CL | MD | MD | ▰ | WN | SC | MD | SC | SC | WI | WZ | WZ | WI | PR | PR | MG | MG | MG |
| | DS | DS | GC | GC | CL | CL | MD | MD | ▲ | WN | SC | MD | SC | SC | WI | WZ | WZ | WI | PR | PR | MG | MG | MG |
| 21 | GW | GW | GW | GW | MG | MG | ZZ | ZZ | GC | GC | GC | GC | MG | MG | | | | | | | | | |
| | GW | GW | ▰ | ■ | MG | MG | ZZ | ZZ | GC | GC | GC | GC | MG | MG | | | | | | | | | |
| 22 | ZX | XX | ● | ● | XL | ZX | MG | MG | ● | ● | WX | WX | ZY | ZY | MD | SC | ZY | | | | | | |
| | ZX | XX | ZX | XL | XL | ZX | MG | MG | ▲ | ▲ | WX | WX | ZY | ZY | ■ | ■ | ZY | | | | | | |
| 23 | SC | MD | ■ | ■ | ■ | ■ | ZC | ZC | WI | WZ | WI | WZ | GW | GW | ▲ | ▲ | / | | | | | | |
| | SC | MD | ▲ | ▲ | ▲ | ▲ | ZC | ZC | WI | WZ | WI | WZ | GW | GW | ★ | ★ | ★ | | | | | | |
| | SC | MD | — | — | — | — | ZC | ZC | WI | WZ | WI | WZ | GW | GW | — | — | — | | | | | | |
| 24 | ZZ | ZZ | DS | ■ | CY | CY | CL | CL | ● | CL | GW | GW | GC | GC | MG | MG | ● | | | | | | |
| | ZZ | ZZ | DS | DS | CY | CY | CL | CL | ▲ | CL | GW | GW | GC | GC | MG | MG | ▲ | | | | | | |
| | ZZ | ZZ | DS | DS | CY | CY | — | — | — | CL | GW | GW | GC | GC | MG | MG | — | | | | | | |
| 25 | ● | ■ | ZC | ZC | ● | ★ | ★ | ● | ZX | XL | ● | ■ | XX | XL | MD | SC | WY | WY | DS | DS | GW | GW | ★ |
| | ▲ | ▲ | ZC | ZC | ▲ | ▲ | ▲ | ▲ | ZX | XL | ▲ | ★ | XX | XL | MD | SC | WY | WY | DS | DS | GW | GW | ▲ |
| | — | — | ZC | ZC | — | — | — | — | ZX | XL | — | — | XX | XL | MD | SC | WY | WY | DS | DS | GW | GW | — |
| 26 | WX | WX | ZX | XL | MD | SC | XL | XX | *ZZ* | *ZZ* | ?? | WN | WX | WY | CZ | ZY | ZY | GC | GC | MG | MG | WI | WI | ★ |
| | WX | WX | ★ | XL | MD | SC | ★ | ★ | ▰ | ▰ | WN | WX | ★ | CZ | ZY | ZY | GC | GC | MG | MG | WI | WI | ★ |
| 27 | MG | MG | GW | GW | CZ | WY | GW | GW | ● | ■ | LZ | ■ | XL | | | | | | | | | | |
| | MG | MG | GW | GW | CZ | WY | GW | GW | ▲ | ▲ | LZ | ★ | ★ | | | | | | | | | | |
| 28 | WX | WX | DS | DS | CL | CL | MD | SC | SC | MD | ● | ● | *ZY* | | | | | | | | | | |
| | WX | WX | DS | DS | CL | CL | MD | SC | SC | MD | ★ | ▲ | ZY | | | | | | | | | | |
| 29 | ? | WY | DS | DS | ZY | ZY | ■ | ▰ | GC | GC | ZC | ZC | WI | WZ | | | | | | | | | |
| | ▰ | WY | DS | DS | ZY | ZY | ▲ | ▲ | GC | GC | ZC | ZC | WI | ▰ | | | | | | | | | |
| | — | WY | DS | DS | ZY | ZY | — | — | GC | GC | ZC | ZC | WI | — | | | | | | | | | |
| 30 | WN | WN | ZZ | ZZ | MG | MG | WI | WZ | CZ | WY | ■ | ■ | SC | MD | ● | ZX | XX | XX | XX | XX | PR | PR | ZC |
| | WN | WN | ZZ | ZZ | MG | MG | WI | WZ | CZ | WY | ▲ | ▲ | SC | ■ | XL | ZX | XX | XX | XX | ▲ | PR | PR | ZC |
| | WN | WN | ZZ | ZZ | MG | MG | WI | WZ | CZ | WY | — | — | — | — | XL | ZX | XX | XX | XX | — | PR | PR | ZC |
| 31 | *GC* | ?? | GW | GW | DS | DS | ZZ | ZZ | MD | SC | ● | ■ | SC | MD | ● | ■ | ● | ■ | WI | WZ | | | |
| | GC | ▰ | GW | GW | DS | DS | ZZ | ZZ | MD | SC | ▲ | ▲ | SC | MD | ▲ | ▲ | ▲ | ★ | WI | WZ | | | |
| 32 | GW | GW | GC | GC | WN | WN | CZ | WY | ZX | ZX | ZX | XL | ■ | ■ | ?? | | | | | | | | |
| | ▰ | ▰ | GC | GC | ★ | WN | CZ | WY | ZX | ZX | ZX | XL | ▲ | ▲ | — | | | | | | | | |
| 33 | MG | MG | CL | ZZ | WI | WZ | DS | DS | ZZ | ZZ | ZC | ZC | DS | DS | MG | MG | SC | MG | DR | | | | |
| | MG | MG | CL | ZZ | ★ | ▰ | ★ | ★ | ZZ | ZZ | ZC | ZC | DS | DS | MG | MG | SC | MG | DR | | | | |
| 34 | DR | DR | WC | WC | WX | WX | GW | GW | GC | GC | GW | XL | PD | PD | ZC | ZC | GW | GW | JZ | JZ | MD | SC | ZY |
| | DR | DR | WC | WC | WX | WX | GW | GW | GC | GC | GW | XL | PD | PD | ZC | ZC | GW | GW | JZ | JZ | MD | SC | ZY |
| 35 | SC | MD | XL | XL | ZX | ZX | DC | LC | DC | DC | PD | | | | | | | | | | | | |
| | ▲ | — | XL | XL | ZX | ZX | DC | LZ | DC | DC | PD | | | | | | | | | | | | |
| | SC | MD | XL | XL | ZX | ZX | DC | LZ | DC | DC | PD | | | | | | | | | | | | |
| 36 | MG | MG | ZZ | ZZ | DC | DC | DC | JZ | JZ | JZ | CZ | WY | GW | GW | PD | PD | ZC | ZC | | | | | |
| | MG | MG | ZZ | ZZ | DC | DC | DC⌋ | JZ | JZ | JZ | CZ | WY | GW | GW | PD | PD | ZC | ZC | | | | | |
| | MG | MG | ZZ | ZZ | DC | DC | DC⌋ | JZ | JZ | JZ | CZ | WY | GW | GW | PD | PD | ZC | ZC | | | | | |
| 37 | DR | DR | DS | DR | WN | WN | WN | WZ | WI | WZ | ZY | ZY | WC | WX | WX | WX | JZ | JZ | JZ | JZ | ZC | ZC | XL |
| | ▰ | ■ | DS | ▲ | WN | WN | WN | WZ | WI | WZ | ZY | ZY | WC | WX | WX | ▲ | JZ | JZ | JZ | ▲ | ZC | ZC | XL |
| | — | — | | DR | WN | WN | WN | WZ | WI | WZ | ZY | ZY | WC | WX | WX | WX | JZ | JZ | JZ | JZ | ZC | ZC | XL |
| 38 | MD | SC | PD | PD | ★ | ★ | CZ | WY | DR | DR | DS | DR | ML | ML | DC | DC | PR | PR | ZZ | ZZ | ZX | ZL | XL |
| | MD | SC | PD | PD | — | — | CZ | WY | DR | DR | DS | DR | ML | ML | DC | DC | ▲ | ▲ | ZZ | ZZ | ZX | ZL | XL |
| | MD | SC | PD | PD | — | — | CZ | WY | DR | DR | DS | DR | ML | ML | DC | DC | PR | PR | ZZ | ZZ | ZX | ZL | XL |
| 39 | GW | GW | GC | GC | ★ | WY | WX | WX | ZZ | ZZ | PR | PR | SC | MD | SC | MD | LZ | LZ | DS | DS | ZC | ZC | CL |
| | ▰ | GW | GC | GC | CZ | WY | WX | WX | ZZ | ZZ | PR | PR | SC | MD | *sc?* | ▰ | LZ | LZ | DS | DS | ZC | ZC | CL |
| | GW | GW | GC | GC | CZ | WY | WX | WX | ZZ | ZZ | PR | PR | SC | MD | SC | MD | LZ | LZ | DS | DS | ZC | ZC | CL |
| 40 | WZ | WZ | WI | WZ | XI | XI | ZY | ZY | XI | XL | ZX | ZX | CZ | WY | GW | GW | MG | MG | WN | WN | CL | WX | LZ |
| | ▰ | ▰ | WI | WZ | XI | XI | ZY | ★ | XI | XL | ZX | ZX | CZ | ★ | GW | GW | ■ | ■ | WN | WN | ▰ | WX | LZ |
| 41 | ZC | ZC | DC | DC | WI | WZ | ZY | ZY | WI | WZ | WX | WX | DR | DR | DC | DC | ZY | ZY | XL | | | | |
| | ZC | ZC | ▰ | ★ | WI | WZ | ZY | ZY | WI | ■ | ▰ | DR | DR | DR | DC | DC | ZY | ZY | XL | | | | |
| 42 | MG | MG | LZ | LZ | GW | GW | WC | ZC | SC | MD | CZ | WY | WY | WY | CZ | WY | MD | SC | DR | DR | PD | PR | GC |
| | MG | MG | LZ | LZ | GW | GW | WC | ZC | — | MD | ★ | ★ | WY | WY | CZ | WY | MD | SC | — | DR | PD | PR | GC |
| | MG | MG | LZ | LZ | GW | GW | WC | ZC | SC | MD | CZ | WY | WY | WY | CZ | WY | MD | SC | DR | DR | PD | PR | — |
| 43 | CZ | WY | WY | CZ | GW | GW | ★ | ★ | ZZ | JX | JZ | JZ | MG | MG | ZC | ZC | MD | SC | MD | SC | WX | WX | WC |
| | ZC | WY | WY | CZ | GW | GW | ▲ | ▲ | ★ | ★ | ★ | ★ | MG | MG | ZC | ZC | MD | SC | MD | SC | WX | WX | WC |
| 44 | ML | JZ | GW | GW | GC | GC | ZY | ZY | MG | MG | ? | ? | ZY | ● | ■ | ● | XX | XX | GW | GW | GC | GC | WI |
| | ML | JZ | GW | GW | GC | GC | ZY | ZY | MG | MG | ? | ? | ▰ | ★ | ■ | ▲ | *X?* | XX | GW | GW | GC | GC | WI |
| 45 | DR | DR | WX | WC | ML | XX | DC | DC | ? | ? | ZZ | ZZ | ZC | ZC | MG | MG | ? | GC | WC | WC | WY | GW | WY |
| | DR | ★ | WX | WC | ML | XX | DC | DC | ? | ? | ZZ | ZZ | ZC | ZC | MG | MG | ★ | *gc* | ▰ ? | ▰ ? | WY | GW | WY |
| 外目 | WI | □ | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | WI | ▱ | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 1 | CZ | WY | WI | WZ | JZ | JZ | ML | ML | LZ | LZ | XR | XR | | | | | | | | | | | |
| | CZ | WY | WI | WZ | JZ | JZ | ML | ML | LZ | LZ | XR | XR | | | | | | | | | | | |
| 2 | LZ | LZ | ZY | ZY | CL | CL | CZ | WY | ZZ | ZZ | WY | WY | DS | DR | ML | ML | JZ | JZ | ★ | PD | CL | CL | WI |
| | LZ | LZ | ZY | ZY | ★ | ★ | CZ | WY | ZZ | ZZ | WY | WY | ★ | ★ | ML | ML | JZ | JZ | ▲ | PD | CL | CL | WI |

《鄭定重校添註遞修本Ａ・Ｉ・Ｂ三種の存缺葉・補刻・影鈔等の対照表》赤＝補刻　黒＝影鈔　所拠：■■鄭　●●魏鄭　▲▲劉

| 24 | 25 | 26 | 27 | 28 | 29 | 30 | 31 | 32 | 33 | 34 | 35 | 36 | 37 | 38 | 39 | 40 | 41 | 42 | 43 | 44 | 45 | 46 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| □ | □ | □ | □ | □ | □ | □ | □ | □ | □ | □ | □ | □ | □ | □ | □ | | | | | | | |
| ?? | LZ | LZ | ?? | ?? | ■ | ■ | ■ | ◢ | ▲ | ▲ | ?? | ?? | ?? | | | | | | | | | |
| ?? | LZ | LZ | ?? | MD | — | — | — | — | — | — | ?? | WZ | — | | | | | | | | | |
| MD | DS | *ds* | WY | WY | WZ | WI | LZ | CL | WY | WY | ▲ | / | | | | | | | | | | |
| — | DS | DS | *wy* | *wy* | WZ | WI | ◢ | CL | WY | WY | ■ | ■ | | | | | | | | | | |
| DS | ZX | ZX | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| ▲ | ZX | *zx* | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| GC | GW | GW | ▲ | ▲ | / | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| GC | ◢ | ◢ | ★ | ★ | ★ | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| MD | GW | GW | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| MD | ★ | ★ | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| CZ | WI | WZ | ★ | ★ | GY | CZ | WI | | | | | | | | | | | | | | | |
| CZ | WI | WZ | ▲ | ▲ | GY | CZ | WI | | | | | | | | | | | | | | | |
| CZ | WI | WZ | — | — | GY | CZ | WI | | | | | | | | | | | | | | | |
| MD | MD | SC | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| MD | MD | SC | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| MD | MD | SC | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| WI | WZ | WI | ZX | ZX | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| WI | WZ | WI | ZX | ZX | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| WI | WZ | WI | ZX | ZX | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| ZZ | XX | XX | DS | DS | DS | DS | WC | WC | WX | WX | JZ | JZ | ML | ML | DR | DR | DR | DR | WI | WZ | ZZ | ZZ |
| ZZ | XX | XX | DS | DS | DS | DS | WC | WC | WX | WX | JZ | JZ | ML | ML | DR | DR | DR | DR | WI | WZ | ZZ | ZZ |
| PR | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| PR | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| GW | GW | GW | ZC | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| GW | ◢ | GW | ZC | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| ZC | WX | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| ZC | WX | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| MG | WY | CY | ZY | ZY | MD | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| MG | WY | CY | ZY | ZY | MD | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| ZC | ZC | ZC | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| ▲ | ZC | ZC | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| ZC | ZC | ZC | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| ★ | ZZ | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| ★ | ZZ | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| ZC | ?? | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| ZC | ?? | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| ZC | ?? | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| ZY | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| ZY | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| XL | XX | XX | XL | ZX | ZY | ZY | LZ | LZ | MD | SC | XL | | | | | | | | | | | |
| XL | XX | XX | XL | ZX | ZY | ZY | LZ | LZ | MD | SC | XL | | | | | | | | | | | |
| XL | XX | XX | — | ZX | ZY | ZY | LZ | LZ | MD | SC | XL | | | | | | | | | | | |
| XI | XL | ZX | WI | WZ | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| XI | XL | ZX | WI | WZ | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| XI | XL | ZX | WI | WZ | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| CL | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| CL | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| CL | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| LZ | GW | GW | GC | GC | ZZ | ZZ | | | | | | | | | | | | | | | | |
| LZ | GW | GW | GC | GC | ZZ | ■ | | | | | | | | | | | | | | | | |
| GC | GC | GC | MG | MG | WN | WN | XI | XI | ZX | XL | ZX | XL | PR | PR | DC | DC | DR | DR | DR | DR | ★ | ★ |
| ◢ | GC | GC | MG | MG | WN | WN | XI | XI | ZX | XL | ZX | XL | PR | PR | — | DC | ◢ | ◢ | DR | DR | ▲ | ▲ |
| — | GC | GC | MG | MG | WN | WN | XI | XI | ZX | XL | ZX | XL | PR | PR | DC | DC | — | — | DR | DR | — | — |
| WC | PD | PD | MG | MG | CL | CL | ZZ | ZZ | DR | DR | WN | WN | DR | DR | LZ | LZ | ML | ML | ML | ML | DC | DC |
| WC | PD | PD | MG | MG | ★ | CL | ZZ | ZZ | DR | DR | WN | = | DR | DR | LZ | LZ | ML | ML | ML | ML | DC | DC |
| WZ | ZC | ZC | CL | WY | ▲ | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| WZ | ZC | ZC | CL | WY | ◢ | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| CL | ? | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| — | ◢ ? | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| WI | WN | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| WI | WN | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |

★★廖　*小文字：鄭*　青：Ⅰ本に有り　*網掛け：墨釘*　—：缺葉　??：未詳　黄：原刻で補足可能　□：本集による補写